

## 岡本韋庵『清国遊記』翻刻・訳註稿

有馬卓也

### 【はじめに】

明治三十三年一月二六日、岡本韋庵は長崎から上海へと旅立つ（翌年七月二日、広島へ帰国）。『清国遊記』はその際に書かれた明治三十三年一月上旬から翌年七月までの旅行記である。出国前の壮行会、及び東京から長崎への移動、そして中国の上海・漢口・武昌・杭州・蘇州のことなどが詳細に記されている。さらに巻末には明治三五年に赴いた山海関・北京、そして帰国後に訪れた北海道の簡単な説明と、「上海河南路樂善堂寄託書籍」と題された書籍リストが付せられている。

本記録は先に翻刻した『支那遊記』（有馬卓也・真銅正宏共著―翻刻・訳註は「徳島大学国語国文学」8―10号、翻刻は「徳島大学総合科学部紀要（言語文化）」3―5号）、『烟台日誌』（有馬卓也単著―「徳島大学総合科学部紀要（言語文化）」3号）、『清国事情』（真銅正宏単著「同志社国文学」47・48号）とはいささか資料的価値を異にする。第一は、日中両国に於ける岡本の友人・知人関係が明らかになる点にある。とりわけ壮行会の出席者の中に重野安繹（成斎）や岡千仞、蒲生重

章、亀谷行（省軒）の名が見えていたり、上海で蔡元培や俞樾に会っていたりしていることなどは興味深い。第二には、岡本が上海に於て出版した『幼学読本標準』（明治三十四年二月六日上梓）、及び『孝経頌解』（明治三十四年二月上梓）、『西学探源』（明治三十四年五月上梓）、『鉄鞭』（明治三十四年六月二日上梓）、『洋学精彩』（明治三十四年四月上梓）等の経過について明らかになる点。そして第三には、本日記には岡本韋庵の漢詩が数多く納められており、岡本詩の製作背景を理解する上で極めて貴重な資料となる点である。本『清国遊記』の資料としての価値は、この三点に集約されよう。

なお、本訳註を稿としたのは、筆者の浅学故、読み解けない部分を数多く残したこと、また枚数の制限上、語釈を加えることができなかったことに因る。完成稿はこれまでに翻刻した岡本の中国旅行記をまとめる際にゆずるとして、ひとまず活字にして諸先生方の御叱正・御指導を仰ぐことにした。

## 【凡例】

一、本稿は岡本章庵『清国遊記』の翻刻である。

一、該本は徳島県立図書館蔵、整理番号2-4/8（岡本章庵先生蔵書及原稿目録）。書誌は以下の通り。明治末写。全四二丁（墨付二七丁、白紙一二丁。以上三九丁は「10大慶堂板」と刻された原稿用紙を使用。巻末に「上海河南路樂善堂寄托書籍」と題された書籍リスト三丁が付加されている）。每半葉一〇行。厚紙による表紙が前後に施された線装本。さらに図書館で整理の為に付したと推されるB5版洋紙反故の袋綴様の仮表紙あり。縦二三・六糎、横一六・〇糎。

一、本訳註は、原文・書き下し・校註の順に記してある。

一、原文の前に示したゴチック体の日付は筆者が便宜上付したものである。

一、旧字・俗字は新字に改めて記した。

一、文中、判読不可能な文字は■で表記した。

一、文中、岡本章庵が人の姓名等を記憶しておらず、空欄のままにしている部分がある。その場合は、空いている字数分に応じて□を入れた。

一、文中、岡本章庵が割り注を入れている部分がある。その場合は、割り注挿入部に――を前後を挟んで記入した。

一、文中、岡本章庵が頭注を入れてある部分がある。その場合は、頭注が付された日付の末尾部に【頭注】として記入した。

一、文中、岡本章庵が字句を墨筆・朱筆で訂正している部分がある。その場合は、訂正後の文を示し、訂正前の字句を註記した。

一、墨筆訂正は特に漢詩の部分に集中しているが、中には訂正箇所の判別し難いものや、字数の合わない訂正もある。その場合は、訂正前の詩句を示し、訂正後を註記した。

一、文中、明らかに岡本章庵の誤写と認められる部分がある。その場合は、原文を訂正し、訂正前の誤写を註記した。

一、巻末に人名索引を製作した。

## 【翻刻・訳註】

明治三十三年十一月

天皇明治三十三年<sup>①</sup>十一月。余將遊清國、留別諸友。獲律詩三首、請諸老次韵。其一云、欲向西周逸足馳、非閑落魄負明時、天南殺氣蛟螭躍、幕北風塵燕雀悲、交態須從唇齒合、大家方少棟梁支、可將奇禍貽兒輩、秦火燃眉急若斯。其二曰、至誠徵処義旗翻、不朽功名凜烈存、一族四千余百万、五洲多少老老屯、請看闔外風雲急、勿謂窓中日月奔、失却此機無此事、誰知君國本來尊。其三曰、回颿吹散燕山雲、眼看西裝万々群、公法徒存強勝迹、清論爭沒溺援勲、人心激処天容霽、軍紀嚴時地氣薰、若個雄圖誰画得、旁觀長息可堪聞。又獲六首。一云、赤狄遺謀在五洲、并吞尽処刃交喉、雖然天道無遺算、切恐盜風難函瘠、非四億人心奮起、奈三千載史承羞、誰能大胆提雄劍、白甲湖頭斬老虬。二云、堂々閣老腹心臣、三百年

間政柄振、囊底多錢徒致賊、街頭躍馬止揚塵、騰天論議蟬吟  
息、拓地功名電影浪、箇裏元來無樂處、隣他法治自由人。三  
云、小学偏宜行国文、応記六書并画勲、自是優游知識決、無  
為抹殺議論紛、何人大処看如炬、曲士分張氣似雲、西隣方虜  
科場典、可使与帰冥漢君。四云、道權振処自由伸、同異森然  
万物陳、不信天心非我性、誰知為政本修身、只看獸行従多数、  
寧記人靈果回浪、論建非関窮達跡、休将往聖附沈淪。五云、  
児在胎中父母勞、生来喚母日暮々、真機即看精誠処、外鑠何  
須聖哲曹、師友君臣同体運、神天日月一甄陶、須知六合平安  
術、勿説銀河泊鉄艘。六云、天堂地獄果何辺、振古音容一杏  
然、崇拜為奴日束縛、昏迷似酒取狂顛、方便徹陣何懦弱、正  
法操戈孰率先、莫是孔門人自画、六経論説類枯樵。

天皇明治三十三年。十一月。余、将に清国に遊ばんとし、  
諸友に留別す。律詩三首を獲、諸老に次韵を請ふ。其の一に  
云ふ、

欲向西周逸足馳  
非関落魄負明時

西周に向はんと欲して逸足馳せ  
落魄に関はるに非ず 明時に負くの  
み

天南殺氣蛟螭躍

天南の殺氣 蛟螭おど躍る

幕北風塵燕雀悲

幕北の風塵 燕雀悲しむ

交態須従唇齒合

交態須らく唇齒の合するに従ふべし

大家方少棟梁支

大家 方に少なし 棟梁の支え

可将奇禍貽児輩

奇禍を将て児輩に貽すべし

秦火燃眉急若斯

秦火の燃眉 急なること斯の若し

其の二に曰く、

至誠徵処義旗翻  
不朽功名凜烈存  
一族四千余百万  
五洲多少老老屯  
請看閩外風雲急  
勿謂窓中日月奔  
失却此機無此事  
誰知君国本来尊  
其の三に曰く、

回飈吹散燕山雲  
眼看西装万々群  
公法徒存強勝迹  
清論争没溺援勲  
人心激処天容霽  
軍紀嚴時地氣薰  
若個雄図誰画得  
旁觀長息可堪聞

んや

又六首を獲。一に云ふ、

赤狄遺謀在五洲、  
并吞尽処刃交喉、  
雖然天道無遺算、  
切恐盜風難函瘳、

非四億人心奮起、  
奈三千載史承羞、  
誰能大胆提雄劍、  
白甲湖頭斬老虬。

二に云ふ、

堂々閣老腹心臣、  
三百年間政柄振、  
囊底多錢徒致賊、  
街頭躍馬止揚塵、  
騰天論議蟬吟息、  
拓地功名電影泯、  
箇裏元来無樂処、  
隣他法治自由人。

三に云ふ、

小学偏宜行国文、  
応記六書并画勲、  
自是優游知識浹、  
無為抹殺議論紛、  
何人大処看如炬、  
曲士分張氣似雲、

西隣方廢科場典、  
可使与歸冥漠君。

四に云ふ、

四億人心の奮起するに非ざれば  
三千載 史の羞を承くるを奈せん  
誰か能く大胆もて雄剣を提へん  
白甲の湖頭 老虬を斬る

堂々の閣老 腹心の臣

三百年間 政柄振ふ  
囊底の多錢は 徒に賊を致すのみ  
街頭の躍馬は 止に塵を揚ぐるのみ  
騰天の論議 蟬吟息む  
拓地の功名 電影泯ぶ  
箇裏 元来 樂処なし  
隣他は法治 自由の人

小学は偏へに宜しく国文を行ふべし  
応に六書並びに画勲を記すべし  
是より優游として知識浹し  
無為 抹殺 議論紛たり  
何れの人の大処 看ること炬の如し  
曲士の分張すること 氣 雲に似たり

西隣は方に廢す 科場の典  
与に冥漠の君に歸せしむべし

道權振処自由伸、  
同異森然万物陳、  
不信天心非我性、  
誰知為政本修身、

只看獸行従多数、  
寧記人靈果叵泯、  
論建非関窮達跡、  
休将往聖附沈淪。

五に云ふ、

児在胎中父母勞、  
生来喚母日晷々、  
真機即看精誠処、  
外鑠何須聖哲曹、  
師友君臣同体運、  
神天日月一甄陶、  
須知六合平安術、  
勿説銀河泊鉄艘。

六に云ふ、

天堂地獄果何辺、  
振古音容一杏然、  
崇拜為奴日束縛、  
昏迷似酒取狂顛、  
方便徹陣何懦弱、

道權の振ふ処は自由伸ぶ  
同異森然として万物陳ぶ  
信ぜず 天心 我が性に非ざるを  
誰か知る政を為すの本は修身にあるを

只だ看る 獸行の多数に従ふを  
寧ぞ記さん 人靈果して叵に泯ぶと  
論建 窮達の跡に關するに非ず  
休将 往聖 沈淪に附す

児 胎中に在りては父母勞す  
生れ来りては母を喚ぶこと日々晷々  
真機 即ち精誠の処を看  
外鑠 何ぞ聖哲の曹を須たん  
師友 君臣 体を同じくして運る  
神天 日月 一甄陶  
須らく六合平安の術を知るべし  
説く勿れ 銀河 鉄艘を泊むるを

天堂 地獄 果して何れの辺ぞ  
振古 音容 一杏然  
崇拜 奴と為り 日に束縛せられ  
昏迷すること酒に似て狂顛を取る  
方便 徹陣 何れか懦弱なる

正法操戈執率先、正法 操戈 孰れか率先せん

莫是孔門人自画、莫是孔門人自画

六経論説類枯禪、六経の論説 枯禪に類す

(1) 原文は「三十年」に作るが、十一月六日と十二月二日の記述に「庚子」とあり、また年が改まった一月一日に「明治三十四年」とあることより、「三十三年」に改めた。

(2) 「回」を墨筆にて「其」に改めてある。

(3) 「冥」を墨筆にて消すが、再び「冥」とする。

一月三日

三日。天長節。麗澤社同人、会於不忍池畔長配亭之楼上。

此会係重野安繹主盟。会者安繹、及蒲生重章・龜谷行・浅見省吾・大畑□□・日下寛・塩谷時敏・山田重光等。蒲生重章贈余詩云、茫々禹域乱如麻、四海誰言一同家、壮士慨然作何事、一朝万里浮仙槎、赤手回瀾恃斯道、独提椽筆向天涯。末曰、送岡本韋庵遊清国。行詩云、曾破鯨涛踏雪山、归来筆硯掩柴関、多年鬱勃胸中氣、吐向吳雲楚水間。前曰、送韋庵先生遊清国。末云、明治初君為開拓判官赴北海。故及。

三日。天長節。麗澤社同人、不忍池の畔の長配亭の楼上に会す。此の会は重野安繹の主盟に係る。会せし者は、安繹、及び蒲生重章・龜谷行・浅見省吾・大畑□□・日下寛・塩谷時敏・山田重光等なり。蒲生重章、余に詩を贈りて云ふ、

茫々禹域乱如麻、茫々たる禹域 乱るること麻の如し

四海誰言一同家、四海 誰か言はん 一同の家

壮士慨然作何事、壮士 慨然として 何事をか作す

一朝万里浮仙槎、一朝 万里 浮仙の槎

赤手回瀾恃斯道、赤手回瀾して斯の道を持み

独提椽筆向天涯、独り椽筆を提して天涯に向ふ

末に曰く、岡本韋庵の清国に遊ぶを送る、と。行の詩に云ふ、

曾破鯨涛踏雪山、曾て鯨涛を破り雪山を踏み

归来筆硯掩柴関、歸り来れば 筆硯 柴関に掩はる

多年鬱勃胸中氣、多年 鬱勃たり 胸中の氣

吐向吳雲楚水間、吐きて向ふ 吳雲楚水の間

前に曰く、韋庵先生の清国に遊ぶを送る、と。末に云ふ、明治の初、君、開拓判官と為りて北海に赴く。故に及ぶ、と。

(1) 原文は「菴」に作るが、「庵」に改めた。

(2) 原文は「菴」に作るが、「庵」に改めた。

一月六日

六日。回瀾社諸人、為予張筵于赤城八幡清風亭。会者岡千

仞・日下寛・塩谷時敏・秋葉猗堂・浅見省吾・藤田□□・藤波皞・□□□□・置塩□□・内田哲太郎等十許人。千仞贈余詩云、旧著新編万卷堆、就中万国史遷才、此游誰不記名字、曾動支那紙価来。末云、清風亭与諸同人、饒韋庵先生再遊禹域。時敏作云、秋風万里歎離羣、征鴈嗷々月裏聞、孤劍夢牽蝦北雪、扁舟吟破楚南雲、麟台何必留英譽、翰海只应策偉勲、今夜赤城亭上宴、長歌一曲此酬君。末云、庚子十一月初六、送韋庵岡本先生遊清国。猗堂作云、話別清風楼上秋、

不須醉裏說窮愁、一枝健筆行裝足、喟斷三皇三五州。寛作云、禹域九州只蕩然、乱余何処看新篇、此間応有英雄起、地氣循環五百年。哲太郎作云、闕里当年訪聖孫、浮槎今叩衆賢門、応酬不用舌人力、好以吟毫代語言。一余賦一詩曰、狂夫大願看光鞭、如螭負山只自憐、今夜清風亭上宴、微言贈別有諸賢一【頭注】此日贈小川平吉作云、此行何必簞奇勲、成敗一善非所聞、休突狂夫倉卒跡、斯文田舎属諸君。

六日。回瀾社諸人、予の為に薙を赤城八幡の清風亭に張る。会せし者は岡千仞・日下寛・塩谷時敏・秋葉猗堂・浅見省吾・藤田□□・藤波皞・□□□□・置塩□□□□・内田哲太郎等十許人なり。千仞、余に詩を贈りて云ふ、

旧著新編万巻堆 旧著 新編 万巻の堆  
就中万国史遷才 就中 万国 史遷の才

此游誰不記名字 此の游 誰か名字を記さざらん  
曾動支那紙俚来 曾て動かし支那の紙俚 来る  
末に云ふ、清風亭に諸同人と、韋庵先生の禹域に再遊するを餞す、と。時敏、作りて云ふ、

秋風万里歎離羣 秋風 万里 羣より離るるを歎ず  
征鴈噉々月裏聞 征鴈 噉々 月裏に聞ゆ  
孤劍夢牽蝦北雪 孤劍 夢牽 蝦北の雪  
扁舟吟破楚南雲 扁舟 吟破 楚南の雲  
麟台何必留英譽 麟台 何ぞ必ずしも英譽を留めん  
翰海只応策偉勲 翰海 只に応に偉勲を策すべし  
今夜赤城亭上宴 今夜 赤城亭上の宴

長歌一曲此酬君 長歌 一曲 此れ君に酬す  
末に云ふ、庚子十一月初六、韋庵岡本先生の清国に遊ぶを送る、と。猗堂、作りて云ふ、

話別清風楼上秋 話別す 清風楼上の秋  
不須醉裏說窮愁 須らく 醉裏 窮愁を説くべからず  
一枝健筆行装足 一枝の健筆 行装足る  
喟斷三皇三五州 喟斷す 三皇三五の州  
寛、作りて云ふ、

禹域九州只蕩然 禹域 九州 只だ蕩然  
乱余何処看新篇 乱余 何れの処か 新篇を看ん  
此間応有英雄起 此の間応に英雄の起つことあるべし  
地氣循環五百年 地氣の循環するは五百年

哲太郎、作りて云ふ、  
闕里当年訪聖孫 闕里 当年 聖孫を訪ね  
浮槎今叩衆賢門 浮槎を今叩く 衆賢の門  
応酬不用舌人力 応酬用ひず 舌人の力  
好以吟毫代語言 好む 吟毫を以て語言に代ふるを

一余、一詩を賦して曰く、  
狂夫大願看光鞭、 狂夫の大願 光鞭を看  
如螭負山只自憐、 螭の山を負ふが如し 只だ自ら憐むのみ  
今夜清風亭上宴、 今夜 清風亭上の宴  
微言贈別有諸賢。 微言 別に贈る 諸賢あり

と一

【頭注】此の日、小川平吉を贈りて作る。云ふ、

此行何必筆奇勲、此の行 何ぞ必ずしも奇勲と筆あおがん

成敗一善非所聞、成敗 一善 聞く所に非ず

休突狂夫倉卒跡、突するを休やめよ 狂夫 倉卒の跡

斯文田舎属諸君。 斯文 田舎 諸君に属す

十一月一日

十一日。午後大雨。清国留学生監督錢君恂、為予設別宴于牛簾簾筍吉熊樓。坐有記室□煜・商人王惕齋。大醉快甚。賦一絕句謝之曰、先生為我故張筵、<sup>①</sup> 應是窮人謂可憐、一醉夷然無別語、如雲逸氣突西天。錢次韻曰、步韻乞政之。曰、話別姑張一尺筵、腥風吹海悄相憐、<sup>②</sup> 殺那旭日開雲幕、始識東方此六天。余以康節句雖老精神未耗時七字以示之。錢遽有作曰、雖老精神未耗時、兩人心事兩人知、願君此去加餐飯、歸日相逢再進卮。予和之曰、雖老精神未耗時、好將宿志托新知、嗟君日域觀光志、欲奉中原萬歲卮。

十一日。午後大いに雨ふる。清国留学生監督錢君恂、予の為に別宴を牛簾簾筍吉熊樓に設く。坐に記室□煜・商人王惕齋あり。大いに酔ひ快なること甚だし。一絶句を賦して之に謝して曰く、

先生為我故張筵、 先生 我が為の故に筵を張る

應是窮人謂可憐、 應に是れ窮人憐むべしと謂ふべし

一醉夷然無別語、 一醉 夷然として 別語なし

如雲逸氣突西天。 雲の如き逸氣 西天を突く

錢、韻に次して曰く、韻に歩して之を政まささんことを乞ふ。曰く、

話別姑張一尺筵、 話別 姑張 一尺の筵

腥風吹海悄相憐、 腥風 海に吹き 悄うれひ相憐れむ

殺那旭日開雲幕、 殺那 旭日 雲幕を開く

始識東方此六天。 始めて識る 東方は此れ六天なるを

余、康節の句の「雖老精神未耗時」の七字を以て之に示す。

錢、遽にわかに作ありて曰く、

雖老精神未耗時、 老いたりと雖も 精神 未だ耗せざる時

る時

兩人心事兩人知、 兩人の心事 兩人のみ知る

願君此去加餐飯、 願はくは君此を去りて餐飯を加へよ

歸日相逢再進卮。 歸日 相ひ逢ひて再びさかすき卮を進めん

予、之に和して曰く、

雖老精神未耗時、 老いたりと雖も 精神 未だ耗せざる時

る時

好將宿志托新知、 好し 將に宿志の新知に托さんとし

嗟君日域觀光志、 嗟あは 君 日域 觀光の志

欲奉中原萬歲卮。 中原に奉らんと欲す 萬歲さかずきの卮

(1)「人」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「悄」の下に「吹」の一字があつたが、墨筆により削除されている。

十一月三日

十三日。坂常三郎、招余於富士見樓。座有相良某。嘗遊台灣。

十三日。坂常三郎、余を富士見樓に招く。座に相良某あり。嘗て台灣に遊ぶ。

十一月四日

十四日。旧太学法科生、餞予于亀島坊偕樂園。会者、藤波元雄現為東京地方裁判所部長、小川平吉為弁護士、宮本平九郎為三井鉱山部総督課長兼大学講師、津久井茂為日本銀行文書局第一課長、浅見倫太郎為横浜地方裁判所部長、手島兵次郎為東京構訴院検事、辻秀春為東方地方裁判所予審判事、中山孝一為千葉割引銀行取締役、宮古啓三郎為弁護士。飲酒快甚。余得一絶。曰、且堂告我不平終、果使狂懷滿大東、偕樂園中今夜宴、丈夫贈別樂無窮。

十四日。旧太学法科生、予を亀島坊の偕樂園に餞す。会せし者は、藤波元雄、現は東京地方裁判所部長たり、小川平吉、弁護士たり、宮本平九郎、三井鉱山部総督課長兼大学講師たり、津久井茂、日本銀行文書局第一課長たり、浅見倫太郎、横浜地方裁判所部長たり、手島兵次郎、東京構訴院検事たり、辻秀春、東方地方裁判所予審判事たり、中山孝一、千葉割引銀行取締役たり、宮古啓三郎、弁護士たり。飲酒の快なること甚だし。余、一絶を得。曰く、

且堂告我不平終、且堂 我に平終せざるを告ぐ

果使狂懷滿大東、果して狂懷をして大東に満たしむ

偕樂園中今夜宴、偕樂園中 今夜の宴

丈夫贈別樂無窮。丈夫別れを贈る 樂しみ窮まりなし

(1)「日」を墨筆にて「大」に改めてある。

十一月五日

十五日。早旦。錢恂來訪。欲送余於新橋、辞之<sup>①</sup>。午時五時發家。此行贈余以金者。曰、稗田三平二円、太田代恒徳父子二円、江馬春熙二円、田中弘之<sup>②</sup>二円、岩下敏之五円、谷芳五円、新田国先一円、安藤熊之介一円、三宅正雄一円、石塚左玄五円。而遠山景弼・松本正純・武下嘉吉・須藤求馬等、各有所贈焉。酢屋小松崎茂助贈藏刀杖。是夜汽車直行、達名古屋。

十五日。早旦。錢恂來訪す。余を新橋に送らんと欲するも、之を辞す。午時五時、家を發す。此の行、余に贈るに金を以てする者あり。曰く、稗田三平は二円、太田代恒徳父子は二円、江馬春熙は二円、田中弘之は二円、岩下敏之は五円、谷芳は五円、新田国先は一円、安藤熊之介は一円、三宅正雄は一円、石塚左玄は五円。而して遠山景弼・松本正純・武下嘉吉・須藤求馬等、各おの贈りし所あり。酢屋小松崎茂助は藏刀杖を贈る。是の夜、汽車直行し、名古屋に達す。

(1)「早旦」より「辞之」に至るまで、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「加藤」を墨筆にて「田中」に改めてある。



(3)「須藤求馬」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

十一月一日

十六日。未明少雨。訪四宮憲章於二葉町官宅。時憲章為幼年校教員。欲延余其家。有約故也。是夜校長山本悌三郎來訪。阿波人也。

十六日。未明少しく雨ふる。四宮憲章を二葉町の官宅に訪ぬ。時に憲章は幼年校の教員たり。余を其の家に延まねかんと欲す。約あるが故なり。是の夜、校長山本悌三郎來訪す。阿波人なり。

十一月七日

十七日。午前十時<sup>(1)</sup>、上幼年校演説。生徒肅聴。一時半而罷。雨至甚<sup>(2)</sup>。為悌三郎及教員見饗于偕行社。教頭原□□訪余於四宮。飲酒劇談、達夜半。

十七日。午前十時、幼年校に上り演説す。生徒肅聴す。一時半にして罷む。雨ふること甚だしきに至る。悌三郎及び教員の為に偕行社に饗せらる。教頭原□□、余を四宮に訪ぬ。飲酒劇談、夜半に達す。

(1)「午前十時」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「雨至甚」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

十一月八日

十八日。東海新聞記者葭谷□□、為余周旋廣告西渡之志、設筵于御納屋号客棧。会者、悌三郎及書記官酢□□。学務課長堀内政固等十数人。会城井寿章自伊勢至、中原大作自東京至。大作住京都釜座港夷川街之上。嘗饗余於東京日本橋区数寄屋町末広館。尋訪余廬、礼甚厚<sup>(1)</sup>。会其突、至醉眼熟視不弁其為、大作頗失礼款甚。拉寿章去。同宿四宮氏。

十八日。東海新聞記者葭谷□□、余の為に周旋して西渡の志を広告し、筵を御納屋号客棧に設く。会せし者は、悌三郎及び書記官酢□□。学務課長堀内政固等十数人なり。城井寿章の伊勢より至り、中原大作の東京より至るに会す。大作は京都釜座港夷川街の上に住す。嘗て余を東京日本橋区数寄屋町の末広館に饗す。余の廬を尋訪し、礼すること甚だ厚し。其の突に会し、醉眼熟視、其の為を弁ぜざるに至り、大作頗る礼款を失すること甚だし。寿章を拉ひきて去る。同に四宮氏に宿す。

(1)「醉眼」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

十一月九日

十九日。辞四宮氏、訪高塚二男三郎。為其所饗。子後辞去。直赴西京憲章。贈金二円□□一円。

十九日。四宮氏を辞して、高塚の二男の三郎を訪ぬ。其の饗する所と為る。子後、辞して去る。直ちに西京の憲章に赴く。金二円□□一円を贈る。

一月二〇日

二十日。早抵東本願寺。遂訪石川舜台于柳馬場枳殼小路。

達福本誠介書、不得見去。訪安藤省軒・中村大作。午牌、過<sup>①</sup>旧友宮島順治許。為未亡人所饗去。抵本願寺。遂見舜台及<sup>②</sup>龍谷<sup>③</sup>經丸。經丸為清國別院主幹。作書報別院。是夜、汽車大坂過山崎。見岡田幾三郎。遂周去宿岡田氏。

二十日。早く東本願寺に抵る。遂に石川舜台を柳馬場枳殼小路に訪ぬ。福本誠介の書を達<sup>とど</sup>けども、見ゆるを得ずして去る。安藤省軒・中村大作を訪ぬ。午牌、旧友宮島順治の許<sup>もと</sup>を過る。未亡人の饗する所と為りて去る。本願寺に抵る。遂に舜台及び龍谷<sup>アガタニ</sup>經丸に見ゆ。經丸は清國別院の主幹たり。書報別院を作る。是の夜、汽車大坂より山崎を過ぐ。岡田幾三郎に見ゆ。遂に周去して岡田氏に宿す。

(1)「故」を墨筆にて「旧」に改めてある。

(2)「台」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(3)「龍谷」を墨筆にて消すが、再び「龍谷」とする。

一月二一日

二十一日。早旦。訪藤田南岳。座見山田某。杵築人云。遂見山本憲。遂去。訪伊藤介夫。為其饗。介夫、使余購求明以上故書。乃辞去。是夜九時、桑山国五郎來訪。

二十一日。早旦。藤田南岳を訪ぬ。座に山田某に見ゆ。杵築人と云ふ。遂に山本憲に見ゆ。遂に去る。伊藤介夫を訪ぬ。其の饗するところと為る。介夫、余をして明<sup>みん</sup>以上の故書を購入せしむ。乃ち辞して去る。是の夜九時、桑山国五郎來訪す。

一月二二日

二十二日。得山本憲介書。請清人<sup>□</sup>于居留地遇其歸鄉。是夜大石許世來訪。

二十二日。山本憲介の書を得。清人<sup>□</sup>に居留地に于て其の郷に歸るに遇ふを請ふ。是の夜、大石許世來訪す。

一月二三日

二十三日。發大坂詣神戸。見郵長会社支店長某、達副社長永井久一郎書。聞船發遂不發。宿常磐号客棧。

二十三日。大坂を發して神戸に詣る。郵長会社支店長某に見え、副社長永井久一郎の書を達<sup>とど</sup>く。船發すと聞くも遂に發せず。常磐号客棧に宿す。

一月二四日

二十四日。駕神戸号船而發。一見柴長五郎。赴上海米租界武昌路同德里佐々木洋行云一

二十四日。神戸号船に駕して發す。一柴長五郎に見ゆ。上海米租界の武昌路同德里的佐々木洋行に赴くと云ふ一

一月二五日

二十五日。早天、達門司住。可十時。遇武山五郎。送稻垣清三郎抵船。与余同船西航。敘旧併及上海客棧之說。清三

郎告余住其家于江西路。蓋与五郎同業煤燠者也。見柴長五郎。一住上海米租界武昌路同德里佐々木洋行<sup>①</sup>。

二十五日。早天、門司に達し住す。十時なるべし。武山五郎に遇ふ。□、稲垣清三郎を送りて船に抵る。余と船を共にして西航す。旧を叙し併せて上海客棧の説に及ぶ。清三郎、余に其家の江西路に住すを告ぐ。蓋し五郎と共に煤燠を業する者なり。柴長五郎に見ゆ。一上海米租界の武昌路同德里的佐々木洋行に住す。

(1) 原文は「祖」に作るが、文意により「租」に改めた。

十一月二十六日

二十六日。早達長崎住。一日登陸。詣諏訪社、過円山休茶店。喫餅乃去。夜六時<sup>①</sup>解纜。

二十六日。早、長崎に達し住す。一日陸に登る。諏訪社に詣り、円山を過りて茶店に休す。餅を喫して乃ち去る。夜六時、纜を解く。

(1) 「六時」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

十一月二十七日

二十七日。見陸軍一等軍医神保涛三郎<sup>①</sup>。現住漢口領事館云。

二十七日。陸軍一等軍医神保涛三郎に見ゆ。現は漢口領事館に住すと云ふ。

(1) 「陸軍一等軍医」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

十一月二十八日

二十八日。早達吳淞江口。過潮枯、及暮乃進。遂登陸。宿清三郎氏。見高間弥之助。一見宝辺森太郎。

二十八日。早、吳淞江口に達す。潮の枯るるを過ぎて、暮に及びて乃ち進む。遂に陸に登る。清三郎氏に宿す。高間弥之助に見ゆ。一宝辺森太郎に見ゆ。

十一月二十九日

二十九日。抵領事館、見小田切□□。達細川護美及中西正樹書。抵樂善堂、見小林新六。達岸田吟香。松本正純書。抵申報館、見主筆井手三郎。達王惕齋書。抵大東汽船会社、見白岩龍平。達遠山景直・陸実等書。遇渡辺正雄<sup>①</sup>。抵滬報、会井手某不在。遂抵同文書院、見書生中村兼善等<sup>②</sup>而歸。

二十九日。領事館に抵り、小田切□□に見ゆ。細川護美及び中西正樹の書を達く。樂善堂に抵り、小林新六に見ゆ。岸田吟香・松本正純の書を達く。申報館に抵り、主筆井手三郎に見ゆ。王惕齋の書を達く。大東汽船会社に抵り、白岩龍平に見ゆ。遠山景直・陸実等の書を達く。渡辺正雄に遇ふ。滬報に抵り、井手某に会せんとするも不在なり。遂に同文書院に抵り、書生中村兼善等に見えて歸る。

(1) 「遇渡辺正雄」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2) 「中村兼善等」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

十一月三〇日

三十日。抵三井物産会所、見小室三吉。順泰洋行、見吉田順蔵。郵船会社、見水川復太。本願寺別院、見松本孝純。南洋公学、見稻村新六。隔壁有牧放浪住焉。訪之不在。此夜、為公司長鄭玉書所饗。劇談極快。

三十日。三井物産会所に抵り、小室三吉に見ゆ。順泰洋行にて、吉田順蔵に見ゆ。郵船会社にて、水川復太に見ゆ。本願寺別院にて、松本孝純に見ゆ。南洋公学にて、稻村新六に見ゆ。壁を隔てて牧放浪の住すあり。之を訪ぬるも不在なり。此の夜、公司長鄭玉書の饗する所と為る。劇談極めて快なり。

十二月一日

十二月一日。龍平・三吉等來訪。夜、為文廷式所招。飲于妓樓。龍平以車送迎。

十二月一日。龍平・三吉等來訪す。夜、文廷式の招く所と為る。妓樓に飲す。龍平、車を以て送迎す。

十二月二日

二日。早。訪領事館不在。訪龍平亦不在。就車訪文廷式。出午餐。夜牧放浪來訪。

二日。早。領事館を訪ぬるも不在なり。龍平を訪ぬるも亦た不在なり。車に就きて文廷式を訪ぬ。出でて午餐す。夜、牧放浪來訪す。

十二月三日

三日。井手三郎來訪。熊本県人也。現主筆滬報。<sup>(1)</sup>夜大原信來訪。信之松本人。現為同文書院書生。

三日。井手三郎來訪す。熊本県人なり。現は滬報に主筆たり。夜、大原信來訪す。信は之れ松本人なり。現は同文書院の書生たり。

(1)「夜」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「原」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

十二月四日

四日。訪胡惟忠。仲巽於寧波路繩正學堂。觀學童。為胡氏所饗。見宋恕平子。

四日。胡惟忠・仲巽を寧波路の繩正學堂に訪ぬ。學童を觀る。胡氏の饗する所と為る。宋恕平子に見ゆ。

十二月五日

五日。牧放浪來訪。同車訪汪穰卿于太馬路。<sup>(1)</sup>過患痔。訪方燕石于新馬路登賢里四百五十五号金粟齋詠出処。

五日。牧放浪來訪す。車を同にして汪穰卿を太馬路に訪ぬ。一過ちて痔を患ふ。方燕石を新馬路登賢里四百五十五号の金粟齋詠出処に訪ぬ。

(1)「于」の下に「集里賢不在家」の六字があつたが、墨筆により削除されている。

二月六日

六日。訪吾妻兵治於鳳陽館。抵領事館、見小田切勇輔<sup>①</sup>・小田切美寿之助。森惟信、熊本人云<sup>②</sup>。

六日。吾妻兵治を鳳陽館に訪ぬ。領事館に抵り、小田切勇輔・小田切美寿之助に見ゆ。森惟信は、熊本人と云ふ。

(1)「小田切勇輔」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「森惟信、熊本人云」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

二月七日

七日。訪樂善堂、見兵治・牧放<sup>①</sup>。訪白岩龍平、見稲村・牧二子渡武昌之行。放浪拉方燕石来。貸……<sup>②</sup>

七日。樂善堂を訪ぬ、兵治・牧放に見ゆ。白岩龍平を訪ぬ、稲村・牧二子の武昌に渡るの行を見る。放浪、方燕石を拉<sup>ひ</sup>きて来る。貸……

(1)「放」の下に「浪」の一字があつたが、削除されている。

(2)「辰」を墨筆にて「牧」に改めてある。

二月八日

八日。中桐彦太郎・三宅助三郎来訪。对酌劇談。

八日。中桐彦太郎・三宅助三郎来訪す。对酌劇談す。

二月九日

九日。方燕廉、招余及放浪于一品<sup>①</sup>□□設饗。見堀<sup>②</sup>・小田切勇輔。丹波人。与放浪同寓。見嚴復<sup>③</sup>。觀察者。又見劉觀文<sup>④</sup>・汪德淵・孫士経・葉瀚等諸子。

九日。方燕廉、余及び放浪を一品□□に招きて饗を設く。

堀・小田切勇輔に見ゆ。丹波人なり。放浪と寓を同じくす。

嚴復<sup>③</sup>に見ゆ。觀察者たり。又劉觀文・汪德淵・孫士経・葉瀚等の諸子に見ゆ。

(1)「堀」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「丹波人」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(3)「復称」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(4)「觀文」より「葉瀚」に至るまで、墨筆にて行間に加えられたものである。また「劉」の下に「汪」の一字があつたが、「汪德淵」と重複するので削除した。

二月一〇日

十日。詣繩正学堂、見胡惟忠。

十日。繩正学堂に詣り、胡惟忠に見ゆ。

二月一一日

十一日。夜、<sup>①</sup>中村兼善請、抵同文書院、演說一身履歷。

十一日。夜、中村兼善の請ふに應じて、同文書院に抵り、一身の履歷を演説す。

(1)「夜」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

十二月二日

十二日。夜、同小林新六<sup>(1)</sup>、為吾妻兵治所招飲。是日竹内鋭彦来。稻垣氏女婿也。

十二日。夜、小林新六と共に、吾妻兵治の招く所と為りて飲す。是の日、竹内鋭彦来る。稻垣氏の女婿なり。

(1)「同小林新六」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

十二月三日

十三日。方・汪二子来訪。約入不朽会。西京号来着。宇都宮搭来。宿常磐号。

十三日。方・汪の二子、来訪す。不朽会に入るを約す。西京号来着す。宇都宮搭来す。常磐号に宿す。

十二月四日

十四日。稻垣氏会諸人饗之。会者除白岩・牧・稻村・小林外、有堀啓次郎<sup>(1)</sup>・前原某・石田正直・大野千太郎・鈴木左京・会津人。西京丸事務一等。

十四日。稻垣氏、諸人を会して之を饗す。会せし者は白岩・牧・稻村・小林を除きし外は、堀啓次郎・前原某・石田正直・大野千太郎・鈴木左京・会津人なり。西京丸事務一等なり。  
(1)「敬」を墨筆にて「啓」に改めてある。

十二月五日

十五日。早。飲酒。午夜<sup>(1)</sup>、稻垣氏妻帰神戸。与衆相送到船。遂見小田切氏。亦奉命帰航也。

十五日。早。飲酒す。午夜、稻垣氏の妻、神戸に帰る。衆と相送り船に到る。遂に小田切氏に見ゆ。亦た命を奉じて帰航せしものなり。

(1)「夜」の下に「送」の一字があつたが、墨筆により削除されている。

十二月六日

十六日。高間弥之助拉到中桐氏。為其所饗。中桐氏贈余印度銀貨及長崎烟草。一是日午食与稻垣・宇都宮二子同喫。夕議従事活板之志一

十六日。高間弥之助、中桐氏を拉き到る。其の饗する所と為る。中桐氏、余に印度銀貨及び長崎烟草を贈る。一是の日、午食は、稻垣・宇都宮二子と同一喫す。夕、活板に従事するの志を議す一

十二月七日

十七日。夜、為牧卷太郎所饗。孫宝瑄来談。住西門内静室庵浜三多里路奥曲難尋門門読書云。

十七日。夜、牧卷太郎の饗する所と為る。孫宝瑄来り談ず。西門内静室庵浜三多里路奥曲難尋門門<sup>マツ</sup>読書に住すと云ふ。

二月一八日

十八日。抵洋館足取羽白、見堀・前田二子、托武昌之行。夜、為白岩龍平饗于四馬路杏花樓。見岡野某。自漢口。

十八日。洋館足取羽白に抵り、堀・前田二子に見え、武昌の行を托す。夜、白岩龍平の為に四馬路の杏花樓に饗す。岡野某に見ゆ。漢口よりす。

二月一九日

十九日。夜。駕大利丸赴鄂。稻垣・宇都宮諸子、送予到船。稻垣氏贈予烟草及焼酎二壺。

十九日。夜。大利丸に駕して鄂に赴く。稻垣・宇都宮の諸子、予を送りて船に到る。稻垣氏、予に烟草及び焼酎二壺<sup>びん</sup>を贈る。

二月二〇日

二十日。過江陰望朗山。船中見劉慶汾。四川人。嘗為領事官。転少書記官。在我国經十三年。

二十日。江陰を過ぎて朗山を望む。船中、劉慶汾に見ゆ。四川人なり。嘗て領事官たり。転じて少しく書記官たり。我が国に在りて十三年を経。

二月二一日

二十一日。早。過南京。見杭州人葉西平。<sup>①</sup>名爾環者、住杭州下城聯橋木場巷。父死于四川官舍、因往視之云。<sup>②</sup>

二十一日。早。南京を過ぐ。杭州人葉西平に見ゆ。名は爾環は、杭州下城聯橋木場巷に住す。父の四川官舍に死し、因りて往きて之を視ると云ふ。

(1)「見」の下に「■」の一字があつたが、墨筆にて削除されてゐる。

(2)「迎」を墨筆にて「視」に改めてある。

二月二二日

二十二日。船過九江等。劉賦詩贈予。題曰、庚子冬、自滬扶送母櫬歸里。舟中遇日本旧友岡本韋庵。<sup>①</sup>共得縱談時務。口占五律一音贈之。其辞云、六載離蓬島、申江遇故知、交游思往昔、韋庵出示日下。淺見諸君送別序文。讀之因憶諸子、

老態感鬚眉、一韋庵兩鬢如霜。余亦虬髯老■。相顧詩然一易轍。應同見、維新在此時、一韋庵來華。創不朽館、欲冀清日兩國棄隙言好。并望我政府、破除積習、立布新政、転弱為強、以禦外侮。一吾謀適不用、痛哭向天涯。一余曾上書營道未蒙採用。只有向天痛哭耳。一又有題曰、舟中次韋庵先正留別日東諸友原韻。其辞云、頻年作客倦馳驅、又到梅開嶺上時、日蔭暫離終可就、春暉未報不勝悲、閱牆兄弟情還密、巢幕鷦鷯勢豈支、消長陰陽原有數、敢云天道永如斯。更有二首今略焉。葉步予韵詩曰、蓬萊海上蔚祥雲、雅度如君鶴立羣、選述千言宗孔孟、一君撰述甚富、大方均以孔孟為宗主。一甄陶万彙即功勲、一君在本國嘗為教員造就甚多。一初聆偉論心傾折、捧讀佳篇手盪薰、■感東邦三益友、高懷直諒又多聞。更有二首亦略焉。余和劉韵云、猛

火一齊崑嶽燒、天官逸德奈天朝、方逢西磧妖氛熾、且喜東洋  
怨氣消、雖少文章凌碧漢、可無忠烈駕雲霄、居然禹跡三千載、  
不尽長江怒号挑。——劉原作係各報所載津京。乱後事実有感——和  
葉詩云、嗟君星夜遠奔馳、木落霜嚴水涸時、万里風塵終未息、  
余家計畫更堪悲、北瞻華嶽情偏切、南望蛾眉淚不支、吾願西  
湖重見日、晤言船室仍如斯。

二十二日。船は九江等を過ぐ。劉、詩を賦して予に贈る。  
題して曰く、庚子冬、滬より母の櫬を扶送して里に帰る。舟  
中、日本の旧友岡本韋庵に遇ふ。共に縦に時務を談ずるを  
得。五律の一音を口占して之に贈る。其の辞に云ふ、

六載離蓬島、六載蓬島を離れ

申江遇故知、申江故知に遇ふ

交游思往昔、交游往昔を思ひ

——韋庵、日下・浅見諸君の送別の序文を出し示す。之  
を讀みて因りて諸子を憶ふ——

老態感鬚眉、老態鬚眉に感ず

——韋庵の両鬢、霜の如し。余も亦た虬髯老。相詩を  
顧みること然り——

易轍応同見、易轍応に同に見るべし

維新在此時、維新此の時に在り

——韋庵來華す。不朽館を創りて、清日兩國の隙を棄て  
好を言ふを冀はんと欲す。並びに我が政府は、積習  
を破除し、新政を立布し、弱を転じて強と為し、以  
て外侮を禦せんことを望む——

吾謀適不用、吾が謀適に用ひられず  
痛哭向天涯。痛哭天涯に向ふ

——余、曾て道を営むを上書するも、未だ採用を蒙けず。  
只だ天に向ひて痛哭することあるのみ——

又題ありて曰く、舟中、韋庵の先に日東諸友に留別するの原  
韻を正すに次す。其の辞に云ふ、

頻年作客倦馳驅、頻年客と作りて馳驅するに倦む

又到梅開嶺上時、又梅の嶺上に開く時に到る

日蔭暫離終可就、日蔭暫く離れて終に就くべし

春暉未報不勝悲、春暉未だ報ぜず悲みに勝へず

閱牆兄弟情還密、閱牆の兄弟情還密なり

巢幕鷓鴣勢豈支、巢幕の鷓鴣勢豈に支へんや

消長陰陽原有數、消長陰陽原數あり

敢云天道永如斯。敢て云ふ天道永きこと斯の如しと

更に二首あるも今略す。葉、予の韵を歩みて詩して曰く、

蓬萊海上蔚祥雲、蓬萊の海上蔚祥の雲

雅度如君鶴立羣、雅度なること君の如し鶴羣に立つ

選述千言宗孔孟、選述せし千言は孔孟を宗とす

——君の撰述は甚だ富み、大方、均しく孔孟を以て宗主  
と為す——

甄陶万彙即功勳、甄陶の万彙即ち功勳

——君、本国に在りて嘗て教員と為る。造就甚だ多し——  
初聆偉論心傾折、初めて偉論を聆きて心傾折し  
捧読佳篇手盥薰、佳篇を捧読して手盥薰る



## ■感東邦三益友、

## ■感東邦三益の友

高寰直諒又多聞。

高寰の直諒又多聞

更に二首あるも亦略す。

余、劉の韵に和して云ふ、

猛火一齊崑嶽燒、

猛火一齊崑嶽燒け

天官逸德奈天朝、

天官の逸德天朝を奈せん

方逢西磧妖氛熾、

方逢の西磧妖氛熾なり

且喜東洋怨氣消、

且つ東洋の怨氣の消ゆるを喜ぶ

雖少文章凌碧漢、

少なしと雖も文章碧漢を凌ぐ

可無忠烈駕雲霄、

忠烈の雲霄に駕することなかるべし

居然禹跡三千載、

居然たる禹跡三千載

不尽長江怒号挑。

尽きず長江怒号の挑

—劉、原、係各報所載津京に作る。乱の後、事、実に

感あり—

葉の詩に和して云ふ、

嗟君星夜遠奔馳、

嗟君星夜遠く奔馳し

木落霜嚴水涸時、

木落霜嚴水涸るる時

万里風塵終未息、

万里の風塵終に未だ息まず

余家計畫更堪悲、

余家の計畫更に悲みに堪ゆ

北瞻華嶽情偏切、

北瞻すれば華嶽情偏に切なり

南望蛾眉淚不支、

南望すれば蛾眉淚支へず

吾願西湖重見日、

吾願ふ西湖重ねて見る日

晤言船室仍如斯。

船室に晤言すること仍斯の如し

(1) 原文は「違菴」に作るが、「韋庵」に改めた。

(2) 「知」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(3) 原文は「菴」に作るが、「庵」に改めた。

(4) 「營」の下に「路」の一字があつたが墨筆により削除されている。

(5) 「相」を墨筆にて「重」に改めてある。

一二月二三日

二十三日。早晨。達漢口。見領事官瀨川浅之進、通訊官三

輪高三郎、留学生中畑栄□。夜、<sup>1</sup>抵電信局、見福井兌。兌旧

友福井太一弟也。会神保濤三郎自武昌歸。談張鄴等事。爭論

達晨。

二十三日。早晨。漢口に達す。領事官瀨川浅之進、通訊官

三輪高三郎、留学生中畑栄□に見ゆ。夜、電信局に抵り、福

井兌に見ゆ。兌は旧友福井太一の弟なり。神保濤三郎の武昌

より歸るに会す。張鄴等の事を談ず。爭論、晨に達す。

(1) 「遂」を墨筆にて「夜」に改めてある。

一二月二四日

二十四日。午餐、從瀨川氏見木野村正徳。訪宗方小三郎不

見。泛船而歸。

二十四日。午餐、瀨川氏に従ひて木野村正徳に見ゆ。宗方

小三郎を訪ぬるも見えず。船を泛<sup>う</sup>べて歸る。

一二月二五日

二十五日。早、抵武昌。見陸軍大尉大原武慶。暮<sup>1</sup>歸港。同

大利丸船米山庸義、為劉慶汾為饗。<sup>(2)</sup>座見大瀧八郎。□、為農學士美代清秀・吉田永二郎所饗。

二十五日。早、武昌に抵る。陸軍大尉大原武慶に見ゆ。暮、港に帰る。大利丸船の米山庸義とともに、劉慶汾の為に饗を為す。座に大瀧八郎に見ゆ。□、農學士美代清秀・吉田永二郎の饗する所と為る。

(1)「暮」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「座」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

## 一月二十六日

二十六日。与岡部和一郎同、赴武昌、投大原氏。夜、為其所饗。木野村政徳、中野太郎、野村岩蔵及美代・吉田二子、峯村善蔵等、皆来会。木野村主通訳、中野主翻訳、野村練兵、並同武慶嘗在武備学堂。峯村主教養蚕。同美代等、住農務学堂。

二十六日。岡部和一郎と共に、武昌に赴き、大原氏に投ず。夜、其の饗する所と為る。木野村政徳、中野太郎、野村岩蔵、及び美代・吉田二子、峯村善蔵等、皆来り会す。木野村は通訳を主り、中野は翻訳を主り、野村は兵を練す。並びに武慶と同一に嘗て武備学堂に在り。峯村は養蚕を教ふるを主る。美代等と共に、農務学堂に住す。

(1)「与岡部和一郎同」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

## 一月二十七日

二十七日。徐建寅来訪。<sup>(1)</sup>抵自強学堂、訪柳原又熊。教日本語者也。夜飲于大原氏。次同氏及中野詩韵曰、眼看燕山妖慧爛、誰知佗日楚囚寇、人情反覆雲陰霽、<sup>(2)</sup>国運推移歲燠寒、<sup>(3)</sup>那耐王孫千里隔、<sup>(4)</sup>偏憐聖裔一家殘、<sup>(5)</sup>黑龍西去吾心切、<sup>(6)</sup>欲斬江源老可汗。<sup>(7)</sup>

二十七日。徐建寅来訪す。自強学堂に抵り、柳原又熊を訪ぬ。日本語を教ふる者なり。夜、大原氏に飲す。同氏及び中野の詩韵に次して曰く、

眼看燕山妖慧爛、<sup>(1)</sup> 眼看の燕山 妖慧爛く

誰知佗日楚囚寇、<sup>(2)</sup> 誰か知る 佗日 楚囚の寇たるを

人情反覆雲陰霽、<sup>(3)</sup> 人情 反覆 雲陰霽る

国運推移歲燠寒、<sup>(4)</sup> 国運推移し 歳 燠寒あり

那耐王孫千里隔、<sup>(5)</sup> 那ぞ耐へん 王孫 千里の隔たり

偏憐聖裔一家殘、<sup>(6)</sup> 偏に憐む 聖裔 一家の殘

黑龍西去吾心切、<sup>(7)</sup> 黑龍西のかた去り 吾が心 切なり

欲斬江源老可汗。<sup>(8)</sup> 斬らんと欲す 江源の老可汗

(1)「徐建寅来訪」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「人間榮辱花開落」を墨筆にて「人情反覆雲陰霽」に改めてある。

(3)「旺衰鼎」を墨筆にて「推移歳」に改めてある。

(4)「遮莫家山」を墨筆にて「那耐王孫」に改めてある。

(5)「客寓」を墨筆にて「聖裔」に改めてある。

(6)「樽」を墨筆にて「家」に改めてある。

(7)「白迦湖畔吾懐切」を墨筆にて「黒龍西去吾心切」に改めてある。

(8)「西陸」を墨筆にて「江源」に改めてある。

二月二十八日

二十八日。寒甚終日不出。

二十八日。寒さ甚だしく、終日出でず。

二月二十九日

二十九日。河瀬儀太郎来訪。在商務報任訳云。

二十九日。河瀬儀太郎来訪す。商務報に在りて訳に任せらると云ふ。

二月三十日

三十日。大原氏設忘年会於演武道場。会呉元愷・張彪及護軍右旗營監王得勝等。至氏擊劍其母侵眉尖刀。衆莫不曷采。

三十日。大原氏、忘年会を演武道場に設く。呉元愷・張彪及び護軍右旗營監王得勝等に会す。氏の其の母を擊劍し眉の尖刀を侵すに至る。衆、曷采せざるはなし。

(1)原文は「妄年会」に作るが、文意により「忘年会」に改めた。

(2)「護軍右旗營監」は、墨筆にて行間に加えられたものである。また「軍」の下に「遊」の一字があったが、削除さ

れている。

二月三十一日

三十一日。夜復設会。神保氏有除夜作。余次其韵云、六十加三客、一生奇数人、<sup>(1)</sup>饒年居首座、拍々欲懷春。又次中野太郎韵曰、人間何処托身謀、滔々風波眼底浮、百歲空懷千歲志、一年欲画万年籌、微軀好向蝦中瘞、壯胆其如漢口浮、今夜朦朧除夜月、忘他六十二春愁。

三十一日。夜、復た会を設く。神保氏、除夜の作あり。余、其の韵に次して云ふ、

六十加三客、六十 三客を加へ

一生奇数人、一生 奇数の人

饒年居首座、饒年 首座に居り

拍々欲懷春。拍々 春を懷かんと欲す

又中野太郎の韵に次して曰く、

人間何処托身謀、人間 何れの処か 身謀を托す

滔々風波眼底浮、滔々たる風波 眼底に浮ぶ

百歲空懷千歲志、百歲 空しく懷く 千歳の志

一年欲画万年籌、一年 画さんと欲す 万年の籌

微軀好向蝦中瘞、微軀 好みて蝦中の瘞に向ふ

壯胆其如漢口浮、壯胆 其れ漢口に浮ぶが如し

今夜朦朧除夜月、今夜 朦朧 除夜の月

忘他六十二春愁。他を忘る 六十二春の愁

(1)「身」を墨筆にて「人」に改めてある。

明治三十四年一月一日

明治三十四年。一月一日。早起登武昌山。眺望乃歸寓。大原氏設宴道場。余次神保氏韵云、氤氳春氣動、宇宙一齊清、望日登高処、洋々万載声。遂抵漢口領事館。拝陛下真影。抵大元号船、為森初太郎為饗。

明治三十四年。一月一日。早起して武昌山に登る。眺望して乃ち寓に歸る。大原氏、宴を道場に設く。余、神保氏の韵に次して云ふ、

氤氳春氣動、 氤氳として春氣動き

宇宙一齊清、 宇宙 一齊 清し

望日登高処、 日を望まんと高処に登れば

洋々万載声。 洋々たる万載の声

遂に漢口領事館に抵る。陛下の真影を拝す。大元号船に抵り、森初太郎の為に饗を為す。

一月二日

二日。修賀状。飲于大原氏。見盧寿齡。為邦語通訳官。<sup>(1)</sup>同文語学生自滬江至。<sup>(2)</sup>中西留応亦自京都至。

二日。賀状を修む。大原氏に飲す。盧寿齡に見ゆ。邦語通訳官たり。同文語学生の滬江より至る。中西留応も亦た京都より至る。

(1)「官」の下に「遇」の一字があつたが墨筆により削除されている。

(2)「某□」を墨筆にて「留応」に改めてある。

一月三日

三日。早、聞雷轟尋大雨。喜飲於大原氏。賦詩次大原氏正旦作曰、蛇山山上望紅輪、父子君臣一体春、何科杖頭錢尽客、長為幕宿人、<sup>(2)</sup>新詩唱難就招韻、<sup>(3)</sup>鮮肉旧習来乍弄、<sup>(4)</sup>不是風神虞大舜、<sup>(5)</sup>六句所慕有双親。

三日。早、雷轟を聞き尋いで大いに雨ふる。暮、大原氏に飲す。詩を賦して大原氏の正旦作に次して曰く、

蛇山山上望紅輪、 蛇山山上 紅輪を望む

父子君臣一体春、 父子君臣 一体の春

何科杖頭錢尽客、 何ぞ杖頭錢の客に尽すを科めん

長為幕宿人、 長為幕□宿人

新詩唱難就招韻、 新詩は唱し難く招韻に就く

鮮肉旧習来乍弄、 鮮肉 旧習 来り乍ち弄す

不是風神虞大舜、 是れ風神虞大舜ならずや

六句所慕有双親。 六句慕ふ所 双親あり

(1)「誰識」を墨筆にて「何科」に改めてある。

(2)「独為楼上酒酣人」を墨筆にて「長為幕宿人」に改めてある。また「幕□」の下に「牀帳」の三字があつたが、削除されている。

(3)「罷先抱腹」を墨筆にて「去難就招韻」に改めてある。さらに「去」の一字を削除してある。また枠外に「頻回」「頭」が墨筆にて記してあるが、いずれの部分の訂正であるのか判別し難い。

(4)「鮮血當来屢動唇」を墨筆にて「鮮肉旧習談来乍弄」に

改めてある。さらに「談」が墨筆にて「■」に改められ、  
「■」も削除されている。

(5)「遮莫人呼虞舜侶」を墨筆にて「不是風神虞大舜」に改めてある。また「風神」の下に墨筆にて「擬希」と行間に書き加えられていたが、削除されている。また「舜」の下に墨筆にて「帝」と行間に書き加えられていたが、削除されている。

一月四日

四日。無事。見岡野増次郎于野村氏。―会東肥洋行。橘三郎来訪―

四日。事なし。岡野増次郎に野村氏に見ゆ。―東肥洋行に会す。橘三郎来訪す―

一月五日

五日。新年宴会。得見汪鳳瀛・徐家幹・凌雲卿・杜長栄・劉温玉・王□□等。

五日。新年宴会。汪鳳瀛・徐家幹・凌雲卿・杜長栄・劉温玉・王□□等に見ゆるを得。

(1)「王□□」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

一月六日

六日。呂烈輝、拉其父長康而至。烈輝日本留学生呂某兄也。六日。呂烈輝、其の父の長康を拉きて至る。烈輝は日本留

学生呂某の兄なり。

一月七日

七日。訪梁鼎葵於両湖書院。談移晷。遇黎元洪来訪。

七日。梁鼎葵を両湖書院に訪ぬ。談じて晷を移して帰る。黎元洪の来訪するに遇ふ。

一月八日

八日。与書生松本洪□・高森強―太郎トモ―同謁曾文正公廟。見樹木繁茂。感山林無制。登蛇山、眺望乃歸。贈七絶句于梁氏。

八日。書生松本洪□・高森強―太郎とも―と共に曾文正公廟を謁す。樹木の繁茂せるを見る。山林の制なきを感ず。蛇山に登り、眺望して乃ち帰る。七絶句を梁氏に贈る。

一月九日

九日。天陰。講日德黑傑児之学説終日。

九日。天陰る。日德黒傑児の学説を講じて日を終ふ。

一月一〇日

十日。如昨。午後、四少年、齋河瀬氏至。筆談移晷。

十日。昨の如し。午後、四少年、河瀬氏に齋られて至る。筆談して晷を移す。

(1)「土人」を墨筆にて「少年」に改めてある。

一月二日

十一日。讀書如昨。

十一日。讀書すること昨の如し。

一月二日

十二日。与松本某同赴漢口領事館、見重慶領事山崎某。晩歸。登黃鶴樓。

十二日。松本某と共に漢口領事館に赴き、重慶領事山崎某に見ゆ。晩歸る。黃鶴樓に登る。

一月三日

十三日<sup>①</sup>。訪汪鳳卿。午後、為黎元洪所招、赴白沙洲。其師陳某、示黃鶴樓詩。因次其韵<sup>②</sup>曰、昨日江頭散筵來、也殊慶此會<sup>④</sup>。曾無仙鶴行留跡<sup>⑤</sup>、唯有狡兒泣擁台、江流万里歸鞋底、騎馬清新<sup>⑧</sup>酒杯、誰識詩客招人意<sup>⑨</sup>、使我漫漫壯志催<sup>⑩</sup>。

十三日。汪鳳卿を訪ぬ。午後、黎元洪の招く所と為りて、白沙洲に赴く。其の師の陳某、黃鶴樓の詩を示す。因りて其の韵に次して曰く、

昨日江頭散筵來、  
也殊慶此會黃埃、  
曾無仙鶴行留跡、  
唯有狡兒泣擁台、  
江流万里歸鞋底、  
騎馬清新酒杯、

昨日 江頭 散筵來る  
也 殊に此の黃埃に會するを慶ぶ  
曾て仙鶴の行留の跡なし  
唯だ狡兒の擁台に泣くことあるのみ  
江流 万里 鞋底に歸す  
騎馬 清新 酒杯にす

誰識詩客招人意、誰か識る詩客の人意を招くを

使我漫漫壯志催。我をして漫漫として壯志催さしむ

(1)「日」の下に「見」の一字があつたが、削除されている。

(2)この詩は、墨筆による訂正が雜然としており、最終的な詩句が判別し難い。訂正前の詩句を原文として記し、行間の加筆を註記する。

(3)「江頭散筵」を墨筆にて「樓岸揆勝」に改めてある。

(4)「也」を墨筆にて「偏」に改めてある。「殊」は墨筆にて行間に加えられたものである。梓外に「豈然」とあるが削除されている。梓外に「今日」とある。「會」が墨筆にて「際避」に改めてあるが、削除されている。「黃」が墨筆にて「塵」に改めてある。「黃埃」を墨筆にて「雖知」に改めてある。

(5)「曾」を墨筆にて「豈」に改めてある。「仙」を墨筆にて「子」に改めてある。「跡唯有」が墨筆にて「其奈恨」に改めてある。

(6)「狡」を墨筆にて「乞」に改めてある。また「泣」を墨筆にて「呼」に改めてある。

(7)「江流万里」を墨筆にて「山川廓落」に改めてあるが、削除されている。また梓外に「風」の一字がある。

(8)「騎馬」を墨筆にて「天地」に改めてある。

(9)「識」を墨筆にて「知」に改めてある。また行間に「思鵲影千行千年附」「白沙洲」「科陽曠外回望路」「極目白雲

天辺逸興催」とあるが「鵲影千行」、「■科」の「■」、「路」は削除されている。いずれの部分の訂正であるか判別し難い。

(10)「漫漫」を墨筆にて「居然」に改めてある。

一月一四日

十四日。陰。読孝經校頌解。夜、見大原氏。質疑過失、不得飲酒而寢。

十四日。陰<sup>く</sup>。『孝經』を読み『頌解』を校す。夜、大原氏に見ゆ。過失を質疑し、飲酒するを得ずして寝る。

一月一五日

十五日。早旦。大原氏配來謝忘酒。以五失告大原氏。曰、

強酒苦人。曰、推度疑人。曰、親切反身。曰、異言<sup>イヤミ</sup>防人。曰、交涉<sup>イサカ</sup>佗務。曰、接父或疏。余謂之率直使然。氏大服。

十五日。早旦。大原氏、配し來りて忘酒を謝す。五失を以て大原氏に告ぐ。曰く、強酒は人を苦しむ。曰く、推度は人を疑ふ。曰く、親切は身に反る。曰く、異言<sup>イヤミ</sup>は人を防ぐ。曰く、交渉は務を佗<sup>ほか</sup>にす。曰く、父に接するに或は疏。余、之を謂ふこと率直使然たり。氏、大いに服す。

一月一六日

十六日。天陰。寒甚。余將帰滬。大原氏設宴。会者、神保・

河瀬二人。河瀬氏光成曰、老来意氣益雄豪、四百余州似一毫、

經国文章誰是匹、千秋万古日輪高。余步<sup>①</sup>其韵曰、一任天真奈粗豪、豪腸<sup>②</sup>統処忽揮毫、勸看最上人間樂、都逗樽前醉語高。衆要余留別。乃走筆曰、豪氣由来想祖宗、只看兒輩少英雄、休道先生不遜<sup>③</sup>甚、欲班伴食宰相中。大原氏次余韵曰、君去何辺欲問宗、滿廷碌碌偽英雄、四千余載興亡跡、都落今宵酒盛中。河瀬氏詩云、日東第一大儒宗、意氣老来雄又雄、誰識滿腔兵戟躍、縱橫禹域九州中。神保氏詩云、欲立良図答祖宗、南船北馬氣逾雄、誰知万卷縱橫字、綫出櫛風沐雨中。河瀬氏更得一首曰、夜雨蕭々此送君、滿腔感慨乱如雲、堪憐禹域無人物、欲植先生經国文。夜半就寢。雪。

十六日。天陰<sup>く</sup>。寒さ甚だし。余、將に滬に帰らんとす。大原氏、宴を設く。会せし者は、神保・河瀬の二人なり。河瀬氏光成曰く、

老来意氣益雄豪、老来 意氣 益ます雄豪  
四百余州似一毫、四百余州 一毫に似たり

經国文章誰是匹、經国の文章 誰か是れ匹せん  
千秋万古日輪高。千秋 万古 日輪高し

余、其の韵に歩いて曰く、

一任天真奈粗豪、天真に一任す 粗豪を奈せん<sup>いかん</sup>

豪腸統処忽揮毫、豪腸の統く処 忽ち揮毫す

勸看最上人間樂、看るを勸む 最上の人間の楽しみ

都逗樽前醉語高。都<sup>みな</sup> 樽前に逗まりて醉語高し

衆、余に留別を要む。乃ち筆を走せて曰く、

豪氣由来想祖宗、豪氣の由来 祖宗を想ふ

只看児輩少英雄、只だ看る 児輩 英雄少なきを  
休道先生不遜甚、休道 先生 不遜なること甚だし  
欲班伴食宰相中、伴食に班せんと欲す 宰相の中

大原氏、余の韵に次して曰く、

君去何辺欲問宗、君 何辺に去る 宗を問はんと欲す

滿廷碌碌偽英雄、滿廷 碌碌たる偽英雄

四千余載興亡跡、四千余載 興亡の跡

都落今宵酒盛中、都すて落つ 今宵 酒盛の中

河瀬氏の詩に云ふ、

日東第一大儒宗、日東第一の大儒宗

意気老来雄又雄、意気老来 雄又雄

誰識滿腔兵戟躍、誰か識る 滿腔 兵戟躍るを

縱横禹域九州中、縱横す 禹域九州の中

神保氏の詩に云ふ、

欲立良図答祖宗、良図を立てて祖宗に答へんと欲す

南船北馬氣逾雄、南船北馬 氣 逾いよ雄なり

誰知万卷縱横字、誰か知る 万卷縱横の字

総出櫛風沐雨中、総出す 櫛風沐雨の中

河瀬氏、更に一首を得て曰く、

夜雨蕭々此送君、夜 雨 蕭々として 此れ君を送る

滿腔感慨乱如雲、滿腔の感慨 乱るること雲の如し

堪憐禹域無人物、堪へて憐む 禹域の人物なきを

欲植先生経国文、植えんと欲す 先生 経国の文

夜半就寝す。雪ふる。

(1) 「韵」を墨筆にて「歩」に改めてある。

(2) 「君万古」を墨筆にて「看最上」に改めてある。

(3) 「楽」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(4) 「要有千年」を墨筆にて「都逗樽前」に改めてある。

(5) 「驕怠」を墨筆にて「不遜」に改めてある。

一月一七日

十七日。雨雪二三寸。<sup>(1)</sup> 梁鼎芬乗轎来訪。贈書及筆墨。此夜、

見農務学提調羅。筆話移時。

十七日。雨雪すること二三寸。梁鼎芬、轎に乗りて来訪す。書及び筆墨を贈る。此の夜、農務学提調羅に見ゆ。筆話して時を移す。

(1) 「雨雪二三寸」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

一月一八日

十八日。発武昌赴漢口。宿福井氏。<sup>(1)</sup> 此日僦輪船于総督、迎

大尉平尾次郎・曹長木下健太帰鄂。二人与武慶同聘者也。<sup>(2)</sup>

十八日。武昌を発して漢口に赴く。福井氏に宿す。此の日、輪船を総督に僦りて、大尉平尾次郎・曹長木下健太の鄂より帰るを迎ふ。二人、武慶とともに聘せられし者なり。

(1) 「大原」を墨筆にて「福井」に改めてある。

(2) 「大尉」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(3) 「曹長」は、墨筆にて行間に加えられたものである。



一月一九日

十九日。為大瀧氏所饗。与宗方小太郎同飲。夜、乘大利号。与武慶父・中村改二同発。<sup>(1)</sup>送者領事瀨川某・大原武慶・神保涛三郎・二橋□□以下数人。遇雨。

十九日。大瀧氏の饗する所と為る。宗方小太郎と同一に飲す。夜、大利号に乗る。武慶の父・中村改二と同一に発す。送りし者は領事瀨川某・大原武慶・神保涛三郎・二橋□□以下数人。雨に遇ふ。

(1)「与武」より「同発」に至るまで、墨筆にて行間に加えられたものである。

一月二〇日

二十日。早辰、発。過九江、夜、至蕪湖泊。

二十日。早辰、発す。九江を過ぎ、夜、蕪湖に至りて泊す。

一月二一日

二十一日。早過南京、夜抵通州。碇泊数時。

二十一日。早、南京を過ぎ、夜、通州に抵る。碇泊するのと数時。

一月二二日

二十二日。晴。<sup>(1)</sup>午牌着上海。直投江西路豊州煤礦公司。

二十二日。晴。午牌、上海に着く。直ちに江西路の豊州煤礦公司に投ず。

(1)「晴」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

一月二三日

二十三日。又雨。<sup>(1)</sup>抵領事館、見副領事松江□□、達橘某介書。訪大原武慶父・中村某於常警号客棧。此次同船来者也。

二十三日。又雨。領事館に抵り、副領事松江□□に見え、橘某介の書を達く。大原武慶の父・中村某を常警号客棧に訪ぬ。此の次は同船にて来る者なり。

(1)「又雨」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

一月二四日

二十四日。托刻書于樂善堂。与宇都宮五郎議不合。

二十四日。刻書を樂善堂に托す。宇都宮五郎と議するも合せず。

一月二五日

二十五日。訪白岩・牧野。遂及中桐被饗。見原某。有教育云。一夜移樂善堂。

二十五日。白岩・牧野を訪ぬ。遂に中桐の饗せらるるに及ぶ。原某に見ゆ。教育にありと云ふ。一夜、樂善堂に移る。

一月二六日

二十六日。送中村某、抵西京号船。併送中桐某。為佐々木洋行・松本某所指導。抵旭館。訪稻村新六。抵鳳陽館。見館

森鴻。本願寺見松竹某。

二十六日。中村某を送り、西京号船に抵る。併せて中桐某を送る。佐々木洋行・松本某の指導する所と為る。旭館に抵る。稲村新六を訪ぬ。鳳陽館に抵る。館森鴻に見ゆ。本願寺にて松竹某に見ゆ。

一月二十七日

二十七日。寒甚。夜見日名子政蔵。

二十七日。寒さ甚だし。夜、日名子政蔵に見ゆ。

一月二十八日

二十八日。館森来訪。尋方・汪二人、拉楊自超而至。蓋南京人。住登賢里金栗斎訳書処云。

二十八日。館森来訪す。尋いで方・汪二人、楊自超を拉きて至る。蓋し南京人ならん。登賢里の金栗斎の訳書処に住すと云ふ。

一月二十九日

二十九日。至三十日、雨屢至。寒甚。読書。無力。

二十九日。三十日に至るまで、雨屢しば至る。寒さ甚だし。読書す。力なし。

一月三十日

三十日。訪白岩、談出板。遂抵本願寺。

三十日。白岩を訪ね、出板を談ず。遂に本願寺に抵る。

二月一日

二月一日。夜<sup>(1)</sup>白岩氏饗片山敏彦<sup>(2)</sup>于聚芳園。為其所招。酔倒就寝。

二月一日。夜、白岩氏、片山敏彦を聚芳園に饗す。其の招く所と為る。酔倒し就寝す。

(1)「夜」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「某」を墨筆にて「敏彦」に改めてある。

二月二日

二日。送片山氏抵船。遂訪水川某于郵船会社。住百老匯三四番号云。

二日。片山氏を送りて船に抵る。遂に水川某を郵船会社に訪ぬ。百老匯三四番号に住すと云ふ。

二月三日

三日。訳外国地誌。寒甚。牧放浪来訪。同飲。

三日。『外国地誌』を訳す。寒さ甚だし。牧放浪来訪す。同に飲す。

二月四日

四日。訪方燕廉談刻鉄鞭。訪宋恕不逢。

四日。方燕廉を訪ね『鉄鞭』を刻するを談ず。宋恕を訪ぬ

るも逢へず。

二月五日

五日。宋恕来談。

五日。宋恕来り談ず。

二月六日

六日。幼学読本標準告成。小林新六贈予烟管。読上諭。

六日。『幼学読本標準』告成す。小林新六、予に烟管を贈る。上諭を読む。

二月七日

七日。刪述孝経頌解。午後、井手□□来訪。

七日。『孝経頌解』を刪述す。午後、井手□□来訪す。

二月八日

八日。如昨。

八日。昨の如し。

二月九日

九日。頌解告成。為稲垣所招。飲尽酔而帰。

九日。『頌解』告成す。稲垣の招く所と為る。飲みて酔いを尽くして帰る。

二月一〇日

十日。説小林氏将同訪稲垣氏。欲得出板資本也。<sup>①</sup>

十日。小林氏に説きて将に同に稲垣氏を訪ぬ。出板資本を得んと欲するなり。

(1)「将」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

二月一日

十一日。紀元節。寒甚。抵領事。本願寺、過縄正覚。夕飲

于豊州公司。

十一日。紀元節。寒さ甚だし。領事・本願寺に抵り、縄正覚を過る。夕、豊州公司に飲す。

二月二日

十二日。寒甚不出。此夕、小林氏外出大酔。

十二日。寒さ甚だしく出でず。此の夕、小林氏外出し大いに酔ふ。

二月三日

十三日。小林臥褥終日。訪清三郎亦臥病。山根某来、談一時。

十三日。小林、褥に臥すること終日。清三郎を訪ぬるも亦た病に臥す。山根某来り、談ずること一時。

二月一四日

十四日。訪館森・平林於蓬監城。<sup>(1)</sup>遂訪米山庸義于吳淞路。<sup>(2)</sup>

十四日。館森・平林を蓬監城に訪ぬ。遂に米山庸義を吳淞路に訪ぬ。

(1)「於」の下に「武」の一字があつたが削除されている。

(2)「烏」を墨筆にて「吳」に改めてある。

二月一五日

十五日。閑居不出。<sup>(1)</sup>

十五日。閑居して出でず。

(1)「閑居不出」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

二月一六日

十六日。方・汪二子来、談印刷之事。余告之分担利害。二人大喜。<sup>(1)</sup>

十六日。方・汪二子来り、印刷の事を談ず。余、之に利害を分担するを告ぐ。二人大いに喜ぶ。

(1)「方汪」より「大喜」に至るまで、一五日の記述としてあつたが、墨筆にて一六日の記載に改めてある。

二月一七日

十七日。至同文館、聞稲村氏。談西伯里事。

十七日。同文館に至り、稲村氏に聞ず。西伯里<sup>シベリ</sup>の事を談ず。

二月一八日

十八日。結城琢自台湾來訪。童使予着清帽。大笑。

十八日。結城琢、台湾より來訪す。童、予をして清帽を着けしむ。大いに笑ふ。

二月一九日

十九日。清曆元日。同新六抵城内、訪馮耕三。此日至三月十日、在樂善堂日讀書。有陽某屢來訪、無事可記。閣筆。

十九日。清曆元日。新六と共に城内に抵り、馮耕三を訪ぬ。此日より三月十日に至るまで、樂善堂に在りて日々讀書す。陽某の屢しば來訪することあるも、事の記すべきものなし。閣筆す。

三月一〇日

三月十日。將觀杭州、日暮、乘大東汽船。小林新六送余抵船。<sup>(1)</sup>

三月十日。將に杭州を觀んとし、日暮、大東汽船に乗る。小林新六、余を送りて船に抵る。

(1)「十」の下に「一」の一字があつたが墨筆により削除されている。

三月一一日

十一日。終日在船。得一詩。曰、無復風流似古人、輪船舟

行思無振、末賢遺蹟吳王域、想起吟風弄月辰、昨日、遇外船

衝突損破。行頗遅。午後十点鐘、達杭州域外拱宸橋。仍臥船。

十一日。終日船に在り。一詩を得。曰く、

無復風流似古人、復た風流なること古人に似たるもの

なし

輪船舟行思無振、輪船 舟行 思ひ振ふことなし

末賢遺蹟吳王域、末賢の遺蹟 吳王の域

想起吟風弄月辰、想起す 吟風弄月の辰<sup>とき</sup>

昨日、外船の衝突し損破するに遇ふ。行くこと頗る遅る。午後十点鐘、杭州域外の拱宸橋に達す。仍りて船に臥す。

(1) 「二」を墨筆にて「一」に改めてある。

(2) 「男児」を墨筆にて「風流」に改めてある。

(3) 「孤舟独坐望前津」を墨筆にて「輪船舟行思無振」に改めてある。また行間に「尽日傍河<sup>■</sup>」とあるが、削除してある。

(4) 「此」を墨筆にて「昨」に改めてある。

三月一二日

十二日<sup>①</sup>。早起。抵汽船支局、見遠藤。

遂儼船入域。抵本願寺別院見伊藤賢道・鈴木広闡等。鈴木元亮与余、別後在此、更見結城琢。

十二日。早起す。汽船支局に抵り、遠藤に見ゆ。

遂に船を儼<sup>か</sup>りて入域す。本願寺別院に抵り、伊藤賢道・鈴木広闡等に見ゆ。鈴木元亮と余と、別れて後に此に在りて、

更に結城琢に見ゆ。

(1) 「三」を墨筆にて「二」に改めてある。

三月一三日

十三日<sup>①</sup>。鈴木元亮、拉余泛舟西湖<sup>②</sup>。詣孤山処士墓<sup>③</sup>。過崇文

書院詣岳王廟等。得一詩曰、林逋墓辺梅蕊薰<sup>④</sup>、岳王廟下柳茅

紛<sup>⑤</sup>、繁将盛事誇千載<sup>⑥</sup>、堪笑崇文幾万羣<sup>⑦</sup>。

十三日。鈴木元亮、余を拉<sup>ひ</sup>きて舟を西湖に泛<sup>う</sup>ぶ。孤山処士の墓に詣る。崇文書院を過りて、岳王廟等に詣る。一詩を得て曰く、

林逋墓辺梅蕊薰、林逋の墓辺 梅蕊薰り

岳王廟下柳茅紛、岳王廟下 柳茅紛す

繁将盛事誇千載、繁将の盛事 千載を誇る

堪笑崇文幾万羣、堪笑す 崇文 幾万羣

(1) 「四」を墨筆にて「三」に改めてある。

(2) 「抵」を墨筆にて「泛舟」に改めてある。

(3) 「觀」を墨筆にて「詣」に改めてある。

(4) 「及」を墨筆にて「墓過崇文書院詣」に改めてある。

(5) 「満開」を墨筆にて「蕊薰」に改めてある。

(6) 「方催」を墨筆にて「茅紛」に改めてある。

(7) 「空」を墨筆にて「繁」に改めてある。

(8) 「壯麗」を墨筆にて「盛事」に改めてある。

(9) 「児輩」を墨筆にて「千載」に改めてある。

(10) 「書院推」を墨筆にて「幾万羣」に改めてある。また行間に「御筆藏書」「擬」「石經」等の文字があるが、いずれ

も削除されている。

三月一四日

十四日<sup>①</sup>。少雨<sup>②</sup>。夜見領事官大河平隆則<sup>③</sup>。夜訪大尉齋藤孝次郎<sup>④</sup>。

十四日。少しく雨ふる。夜、領事官の大河平隆則に見ゆ。夜、大尉齋藤孝次郎を訪ぬ。

(1)「五」は墨筆にて「四」に改めてある。

(2)「雨」の下に「不出」の二字があつたが削除されている。

(3)「夜見領事官大河平隆則」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(4)「孝次郎」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

三月一五日

十五日。言思会鈴木広闡<sup>①</sup>、拉余等抵呉山<sup>②</sup>。得二首曰、報国精神欲一空<sup>③④</sup>、周身智略属无功<sup>⑤⑥</sup>、千秋無限懷人处<sup>⑦⑧</sup>、回首呉山第一峯<sup>⑨</sup>。是日、言思会余演説。夜通辞村山□□来訪<sup>⑩</sup>。

十五日。言思会鈴木広闡、余等を拉きて呉山に抵る。二首を得て曰く、

報国精神欲一空、	報国の精神	一空を欲し
周身智略属无功、	周身の智略	無功に属す
千秋無限懷人处、	千秋無限	人处を懷ふ
回首呉山第一峯。	首を回せば	呉山第一峯

―是の日、言思会にて余演説す。夜、通辞村山□□来訪す―

(1)「六」を墨筆にて「五」に改めてある。

(2)「言思会」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(3)「欲」の下に「突」の一字があつたが削除されている。

(4)「一」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(5)「画」を墨筆にて「智」に改めてある。

(6)「中」を墨筆にて「属」に改めてある。

(7)「千秋」を墨筆にて「□情」に改めてあるが、削除されている。

(8)「無限」を墨筆にて「□□」に改めてあるが、削除されている。

(9)「夜」を墨筆にて「日」に改めてある。

三月一六日

十六日。抵領事見書記生岸某、□□□、児玉某等。遂見大河平氏。午後抵武備学堂、見三宅進蔵。林少雄。橘延次郎<sup>①</sup>。

十六日。領事に抵り書記生岸某、□□□、児玉某等に見ゆ。遂に大河平氏に見ゆ。午後、武備学堂に抵り、三宅進蔵・林少雄・橘延次郎に見ゆ。

(1)「見大」より「次郎」に至るまで、墨筆にて行間に加えられたものである。

三月一七日

十七日。伊藤賢道拉余泛舟西湖。抵靈隠寺及輪光菴。去抵

上中下天笠寺、踰山過龍井寺。再泛湖而帰。得二首曰、靈隱寺辺揆勝去、輪光菴裡覓詩来、仙翁行後人誰在、竹樹扶疏望海台。又曰、万頃湖光一望中、梅花柳絮媚春空、遊人欲訪前朝蹟、行遍孤山北又東。

十七日。伊藤賢道、余を拉きて舟を西湖に泛ぶ。靈隱寺及び輪光菴に抵る。去りて上中下天笠寺に抵り、山を踰へて龍井寺を過ぐ。再び湖に泛べて帰る。二首を得て曰く、

靈隱寺辺揆勝去、靈隱寺辺 勝に揆れて去る

輪光菴裡覓詩来、輪光菴裡 詩を覓めて来る

仙翁行後人誰在、仙翁行きし後 人誰か在る

竹樹扶疏望海台。竹樹 扶疏として 海台を望む

又曰く、

万頃湖光一望中、万頃 湖光 一望の中

梅花柳絮媚春空、梅花 柳絮 媚春の空

遊人欲訪前朝蹟、遊人 訪ねんと欲す 前朝の蹟

行遍孤山北又東。行くこと遍し 孤山 北又東

(1)「中」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「去」を墨筆にて「行」に改めてある。

(3)「一望」を墨筆にて「万頃」に改めてある。

(4)「山縵渺」を墨筆にて「光一望」に改めてある。

三月一八日

十八日。領事官来訪。

十八日。領事官来訪す。

三月一九日

十九日。林孝恂来訪。

十九日。林孝恂来訪す。

三月二〇日

二十日。為領事所饗。見警官□□□蠶□□前原□□。

二十日。領事の饗する所と為る。警官□□□蠶□□前原

□□に見ゆ。

三月二一日

二十一日。八旗人三品官三多来訪。談移晷。贈余其詩集。

二十一日。八旗人三品官の三多来訪す。談じて晷を移す。

余に其の詩集を贈る。

三月二二日

二十二日。日文学堂老書生、拉其友邵章来訪。邵章現任養

正学堂塾正。

二十二日。日文学堂の老書生、其の友の邵章を拉きて来訪

す。邵章は現は養正学堂塾正に任ぜらる。

三月二三日

二十三日。三多又来訪。与結城同出接。

二十三日。三多又来訪す。結城と同一出でて接す。

(1)「品」を墨筆にて「多」に改めてある。

三月二十四日

二十四日。訪林孝恂見其友林琴南。

二十四日。林孝恂を訪ね其の友林琴南に見ゆ。

三月二十五日

二十五日。瓜爾佳<sup>①</sup>來訪。滿洲人也。筆談數刻。

二十五日。瓜爾佳來訪す。滿洲人なり。筆談すること數刻。

(1)「辰」を墨筆にて「瓜」に改めてある。

三月二十六日

二十六日<sup>①</sup>。為通事村山<sup>②</sup>所饗。

二十六日。通事村山<sup>②</sup>の饗する所と為る。

(1)「五」を墨筆にて「六」に改めてある。

三月二十七日

二十七日。林孝恂送酒肉來。琴南又贈古詩於余。

二十七日。林孝恂、酒肉を送りて來る。琴南、又古詩を余に贈る。

三月二十八日

二十八日。又遊西湖。過蠡學堂。見前島某。仙台人。見西ヶ原某。宮津人。遂抵雷宝塔・表忠觀。一得一詩曰、趙宋南陵得吳山、儒雅流風足濟艱、緣是居民懷故主、觀表千載映清灣——二十八日。又西湖に遊ぶ。蠡學堂を過る。前島某に見ゆ。

仙台人なり。西ヶ原某に見ゆ。宮津人なり。遂に雷宝塔・表忠觀に抵る。——一詩を得て曰く、

趙宋南陵得吳山、趙宋南陵吳山を得  
儒雅流風足濟艱、儒雅流風艱を濟ふに足る  
緣是居民懷故主、是に緣りて居民故主を懷ひ  
觀表千載映清灣 觀表千載映清の灣

と——

(1)「觀裨」を墨筆にて「千」に改めてある。

三月二十九日

二十九日。林孝恂、贈余三十金。曰梨棗云々。領事來餞。

又贈二十金。供上梓。遂辭別院去。赴拱宸橋。投大東公司、見龜川某飲酒。快甚<sup>①</sup>。元英抵拱宸橋。

二十九日。林孝恂、余に三十金を贈る。曰く梨棗云々と。領事來り餞す。又二十金を贈る。供に上梓す。遂に別院を辭して去る。拱宸橋に赴く。大東公司に投じ、龜川某に見え飲酒す。快なること甚だし。元英、拱宸橋に抵る。

(1)「投大」より「快甚」に至るまで、墨筆にて行間に加えられたものである。

三月三十日

三十日。自昨夜赴蘇<sup>①</sup>、船不發。遂宿警察官石原氏。自石原夫婦及松尾某紡績会社員、散步郊外。此夜、大東氣船公司來、促乘船。



三十日。昨夜より蘇に赴かんとするも、船、発せず。遂に警察官石原氏に宿す。石原夫婦より松尾某紡績会社員に及ぶまで、郊外を散歩す。此の夜、大東氣船公司来り、船に乗るを促す。

(1)「赴蘇」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「紡績会社員」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

三月三十一日

三十一日。経湖州・震沢・平望・吳江等、夜、達蘇州。同行有土居純橘。土佐人也。宿大東公司。見近藤広蔵<sup>(1)</sup>。東京人云。此日、獲一詩云、欲赴蘇州自杭州、一千余里水程悠、春風駘蕩炊煙靜、北望中原黑氣稠<sup>(2)</sup>。

三十一日。湖州・震沢・平望・吳江等を経て、夜、蘇州に達す。同行に土居純橘あり。土佐人なり。大東公司に宿す。

近藤広蔵に見ゆ。東京人と云ふ。此の日、一詩を獲て云ふ、

欲赴蘇州自杭州、蘇州に赴かんと欲し杭州よりす

一千余里水程悠、一千余里の水程 悠たり

春風駘蕩炊煙靜、春風 駘蕩 炊煙靜かなり

北望中原黑氣稠。 中原を北望せば 黒氣稠なり<sup>(おおい)</sup>

(1)「金」を墨筆にて「近」に改めてある。

(2)「黒」を墨筆にて「白」に改めてあるが、削除されている。

四月一日

四月一日。過吳門橋。得一詩云、吳門橋畔放双眸、濠水東西南北流<sup>(1)</sup>、無数行人肩摩過、千秋誰記伍員頭<sup>(2)</sup>。午後、土居純橘導余到寒山寺。賦一詩曰、夜泊一詩千載留、楓橋情景月中浮<sup>(3)</sup>、吟行偶到寒山寺、為是唐人好句留<sup>(4)</sup>。歸途過留園。詩云、留園一一偉觀存、世上漫誇富貴門<sup>(5)</sup>、俗客不関榮悴事、花前狼藉倒芳樽<sup>(6)</sup>。過胥門作云、李子遺風万古愁<sup>(7)</sup>、真亡小異族難搜<sup>(8)</sup>、遊人底事無情甚、不訪胥門向虎邱。

四月一日。吳門橋を過ぐ。一詩を得て云ふ、

吳門橋畔放双眸、吳門の橋畔 双眸を放つ

濠水東西南北流、濠水 東西南北流る

無数行人肩摩過、無数の行人 肩摩して過ぐ

千秋誰記伍員頭。 千秋 誰か記す 伍員の頭

午後、土居純橘、余を導きて寒山寺に到る。一詩を賦して曰く、

夜泊一詩千載留、夜泊 一詩 千載留む

楓橋情景月中浮、楓橋の情景 月 中に浮ぶ

吟行偶到寒山寺、吟行 偶たま到る 寒山寺

為是唐人好句留。 是が為に 唐人 好句留む

歸途、留園を過ぐ。詩して云ふ、

留園一一偉觀存、留園 一一 偉觀存す

世上漫誇富貴門、世上 漫に誇る 富貴の門

俗客不関榮悴事、俗客は榮悴の事に関せず

花前狼藉倒芳樽。 花前の狼藉 芳樽を倒す

胥門を過ぎて作りて云ふ、

李子遺風万古愁、 李子の遺風 万古の愁

真亡小異族難搜、 真亡 小異 族 搜し難し

遊人底事無情甚、 遊人 底事 無情なること甚し

不訪胥門向虎邱。 胥門を訪ねず虎邱に向ふ

(1) 「滌洄四面」を墨筆にて「東西南北」に改めてある。

(2) この詩は、墨筆による訂正が雑然としており、最終的な詩句が判別し難い。訂正前の詩句を原文として記し、行間の加筆を註記する。

(3) 「夜泊一詩千載留」を墨筆にて「孤客愁眼落月幽」に改めてある。さらに「幽」を墨筆にて「妍」に改めてある。

さらに一度削除された「留」が墨筆にて「樞」に改めてある。

(4) 「情景月中浮」を「千載是風流」に改めてある。また行間に「蹟依然」と墨筆にて加えられている。

(5) 「行」を墨筆にて「筇」に改めてある。

(6) 「留」を墨筆にて「伝」に改めてある。

(7) この詩は、墨筆による訂正が雑然としており、最終的な詩句が判別し難い。訂正前の詩句を原文として記し、行間の加筆を註記する。

(8) 「留」を墨筆にて「名」に改めてある。

(9) 「一一」を墨筆にて「嘖嘖」に改めてある。

(10) 「観存」を墨筆にて「世評」に改めてある。

(11) 「世上漫」を墨筆にて「譙麗長」に改めてある。さらに

「譙麗」が墨筆にて「名勝」に改めてある。

(12) 「誇」の下に墨筆にて「衞曩時昔年豪」が行間に加えられている。さらに「曩」が墨筆にて「昔」に改められている。

(13) 「貴門」を墨筆にて「家」に改めてある。さらに「門」の下に「誰識榮枯全属□非関□千羣花前遊貴来往如伴競紛」が行間に加えられている。

(14) 「花前浪藉倒芳樽」の七字は削除されている。

(15) 「過」の一字が削除されていたが、文意により残してある。

(16) 「留」を墨筆にて「愁」に改めてある。

(17) 「延陵旧物杏」を墨筆にて「真亡小異代族」に改めてある。さらに「代」の一字が削除されている。

#### 四月二日

二日。訪俞曲園先生閣下、投一書。曰、俞大人先生閣下、  
賤姓岡本草字監輔、日本国徳島県人。既年隔為二十六年前、  
到滬。遂遊歴北省、去來諸処。上欲候左右、不能果而去。以  
為遺憾。今次再遊、欲刻拙著数部書、以請諸老生評。譬  
請納負山国不得已耳。妄意知先生不欲言国事、監輔不敢煩黷。  
如得道義高教寡過一言幸甚。前伏惟先生門人甚多。此間或有  
義。俠足以連合中東志士者乎。苟得指導。不為大事。前与  
三多。宋恕諸子叙晤。皆曰、俞先生吾師也。請為足下先容未  
審、果得否。勿却是祈。不堪懇款之至。又訪蔡二源辞曰、蔡

大人閣下。某日本人也。<sup>(22)</sup>嘗得貴友片山某名刺介草字于左右。<sup>(24)</sup>是以來。<sup>(25)</sup>便某欲刻数部書、以問貴國人為貴国計。<sup>(27)</sup>中国後亦所以為敵国計也。<sup>(29)</sup>■謂老生国陋而後進浮■譬諸蚊負山然。是所以請自始、<sup>(32)</sup>不利己一念也。<sup>(33)</sup>奔走数月、未得真知己。<sup>(35)</sup>願先生垂一顧、<sup>(36)</sup>諒愚衷非有半面之識而敢布露肺腹腎腹。唯賴片山氏紹介。

是日遂見二子。筆話数刻乃去。夜乘船。<sup>(40)</sup>得一詩云、太伯恭虔季子清、<sup>(41)</sup>風神千載有余情、誰知末俗荒淫甚、<sup>(42)</sup>一世齊欽吳艷名一歸滬。

二日。俞曲園先生閣下を訪ね、一書を投ず。曰く、俞大人先生閣下。賤姓は岡本、草字は監輔、日本国徳島県人なり。既に年の隔たること二十六年前、滬に到る。遂に北省を遊歴し、諸処を去来す。上りて左右に候せんと欲するも、果すあたはずして去る。以て遺憾と為す。今次再遊し、■拙著数部の書を刻して、以て諸老生の評を請はんと欲す。譬ふるに蚬に山国を負ふを請ふがごときも、已むを得ざるのみ。妄意、先生の国事を言ふを欲せざるを知るも、監輔、敢て煩黷せず。如し道義・高教・寡過・一言を得ば幸甚なり。前に伏して惟みるに、先生は門人甚だ多し。此の間ひ或は義あらん。俠なること以て中東の志士を連合する者に足るか。■苟も指導を得ば、大事と為さず。前に三多・宋恕の諸子と晤ふを叙ぶるに、皆曰く、俞先生は吾が師なり、と。請ふ、足下の為に、先の容も未だ審びらかならざるに、果して得るや否や。是の祈を却くる勿れ。懇款の至に堪へず、と。又蔡二源を訪ぬ。

辞に曰く、蔡大人閣下。<sup>(22)</sup>某、日本人なり。<sup>(24)</sup>嘗て貴友片山某の名刺を得て草字を左右に介す。是を以て来る。便ち某数部の書を刻して、以て貴国人に貴国の計を問はんと欲す。中国は後亦敵国の計を為す所以なり。■謂老生国陋而後進浮■諸を譬ふるに蚊の山を負ふがごとく然り。是れ自ら■始を請ふ所以にして、己を利するの一念ならざるなり。奔走すると数月、未だ真の知己を得ず。願はくは先生一顧を垂れよ。諒に愚衷、半面の識あるに非ずして、敢て肺腹腎腹を布露す。唯だ片山氏の紹介に頼るのみ、と。

是の日、遂に二子に見ゆ。筆話すること数刻にして乃ち去る。夜、船に乗る。

一詩を得て云ふ、

太伯恭虔季子清、太伯の恭虔 季子の清  
風神千載有余情、風神 千載 余情あり  
誰知末俗荒淫甚、誰か知る 末俗の荒淫すること甚だしきを


一世齊欽吳艷名 一世 齊欽吳艷の名





と一

滬に帰る。

(1) 「先生閣下」は、墨筆にて行間に加えられたものである。  
(2) 「某日本人」を墨筆にて「俞大人先生閣下」に改め  
ある。

(3) 「賤姓」を墨筆にて「草字」に改めてある。

- (4) 原文は「輔」の下に「三十年前」の四字があつたが、「二十六年前」と重複するので削除した。
- (5) 「日本国徳島県人」は、墨筆にて行間に加えられたものである。
- (6) 「既年」より「滬遂」に至るまで、墨筆にて行間に加えられたものである。
- (7) 「歴」の下に「貴国」の二字があつたが、削除されている。
- (8) 「帰到滬」が墨筆にて「去往諸処上」に改められている。
- (9) 「候」の下に「于」の一字があつたが、黒筆にて削除されている。
- (10) 「得」が墨筆にて「能」に改められている。
- (11) 「妄意」を墨筆にて「」に改められている。
- (12) 「書」は、墨筆にて行間に加えられたものである。
- (13) 「先一」を墨筆にて「諸老生」に改められている。また墨筆にて「妄愚」の二字が行間に加えられていたが、削除されている。
- (14) 「意在為中国計乃所以為敵国也」を墨筆にて「譬請蚬負山国不得已耳」に改められている。また行間に墨筆にて「計」の一字が加えられていたが、削除されている。
- (15) 「妄意」は、墨筆にて行間に加えられたものである。
- (16) 「監輔」は、墨筆にて行間に加えられたものである。
- (17) 「開化」を墨筆にて「道義高教寡過」に改められている。
- (18) 「伏惟、先生門人甚多。此間或有義。俠足以連合両国志

- 士者乎。苟而後進開化者乎。幸教之、不為大事」は、墨筆にて行間に加えられてものである。さらに「俠足」を「真人」に改めつつあつたが、削除されている。また「両国」が「中東」に改められている。また「而後進開化者乎幸教之」が「得指導」に改められている。
- (19) 「先」の下に「生」の一字があつたが、削除されている。
- (20) 「然」を墨筆にて「達得」に改め、さらに「達」の一字が削除されている。
- (21) 「為幸」を墨筆にて「是析不堪懇款之至」に改められている。
- (22) 「蔡大」より「人也」に至るまで、墨筆にて行間に加えられたものである。
- (23) 「貴友」は、墨筆にて行間に加えられたものである。
- (24) 「賤名」を墨筆にて「草字」に改められている。
- (25) 「便」の下に「惟幸勿咎唐突」の六字があつたが、削除されている。また行間に「幸」とあつたが、削除されている。
- (26) 「以」の下に「資」の一字があつたが削除されている。
- (27) 「問貴国人為貴国計」は、墨筆にて行間に加えられたものである。
- (28) 「国」の下に「後教化」の二字があつたが、削除されている。
- (29) 「所以」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(30)「計」の下に「耳」の一字があつたが削除されている。  
 (31)「也」は、墨筆にて行間に加えられたものである。  
 (32)「消謂」より「■始」に至るまで、墨筆にて行間に加えられたものである。なお行間には「始」の下にさらに「者実」の二字があつたが、削除されている。

(33)「不」の下に「欲説」の二字があつたが、「■在」に改められた後、削除されている。

(34)行間に「身得失」と墨筆にて加えられていたが削除されている。

(35)「己」の下に「将速就帰途」の五字があつたが、削除されている。

(36)行間に「上海人物■数不知貴友心殆有其人憂国乎請為某分之」と墨筆にて加えられていたが削除されている。

(37)「憐」を墨筆にて「諒」に改めてある。

(38)「衷」の下に「不堪懇款之至」の六字があつたが、削除されている。

(39)「吐」を墨筆にて「布」に改めてある。

(40)「船」の下に「帰滬」の二字があつたが、削除されている。

(41)「風神」を墨筆にて「恭虔」に改めてある。

(42)「賢」を墨筆にて「清」に改めてある。

#### 四月三日

三日。午前達滬。見白岩龍平。龍平命其車送余。達樂善堂。

過小林新六外出。訪方燕廉。方來話。

三日。午前、滬に達す。白岩龍平に見ゆ。龍平、其の車に命じて余を送らしむ。樂善堂に達す。小林新六に過るも外出せり。方燕廉を訪ぬ。方、来り話す。

#### 四月四日

四日。訪牧放浪。<sup>①</sup>遂見本願寺松林氏与松原某等同飲。又訪牧氏。見西村某。如不知余者也。

四日。牧放浪を訪ぬ。遂に本願寺松林氏と松原某等とに見え同に飲す。又牧氏を訪ぬ。西村某に見ゆ。余を知らざる者の如きなり。

(1)「放」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「■」を墨筆にて「遂見」に改めてある。

#### 四月五日

五日。着手洋学精彩。終日不出。

五日。『洋学精彩』に着手す。終日出でず。

#### 四月六日

六日。方・葉二子来訪。贈葉祖志一卷。

六日。方・葉二子来訪す。葉に『祖志』一卷を贈る。

#### 四月七日

七日。松林夕来訪。<sup>①</sup>談及鈴木元亮。告余解傭伊。在杭州日

文学堂助伊藤賢道、教育与衆不協也。

七日。松林、夕、来訪す。談、鈴木元亮に及ぶ。余に伊を傭ふを解くを告ぐ。杭州に在りし日文学堂助伊藤賢道、教育の衆と協せざればなり。

(1)「夕」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

四月八日

八日。赴龍華賞桃華。小林新六・日名置□□□□□□二、同舟大醉。還再飲于四馬路□□□□。及帰得前田貞次郎手書。広島人。

八日。龍華賞桃華に赴く。小林新六・日名置□□□□□□□□二、舟を同にして大いに酔ふ。還りて再び四馬路□□□□□□に飲す。帰るに及びて前田貞次郎の手書を得。広島人なり。

四月九日

九日。夜、余罹傷風困臥不能動。

九日。夜、余、傷風に罹り困臥して動くあたはず。

四月一〇日

十日。夜間、宗方小太郎来訪。不能与談。

十日。夜間、宗方小太郎来訪す。与に談ずるあたはず。

四月一日

十一日。天晴。稍快愈。

十一日。天晴る。稍快愈す。

四月一二日

十二日。雨<sup>(1)</sup>。而病遂痊。抵商務見夏某托印刷。

十二日。雨ふる。而して病遂に痊ゆ。商務に抵り夏某に見え印刷を托す。

(1)「曇」を墨筆にて「雨」に改めてある。

四月一三日

十三日。夏贈約書来。武市波五郎来訪。阿波人也。

十三日。夏、約書を贈り来る。武市波五郎来訪す。阿波人なり。

四月一四日

十四日。桂林人龍積芝来訪。使余当復興之任、為之主教。且請買鉄鞭数百部。貸与岡本予。其人住虹口近葉某居云。

十四日。桂林の人龍積芝来訪す。余をして復興の任に当り、之が主教と為さしむ。且つ『鉄鞭』数百部を買はんと請ふ。『岡本予』を貸与す。其の人、虹口近くの葉某の居に住すと云ふ。

四月一五日

十五日。龍又来訪。談及孔宅。在青浦県青奚云。

十五日。龍、又来訪す。談、孔宅に及ぶ。青浦県青奚に在

りと云ふ。

四月一六日

十六日。龍又来訪。余訪小室・稻垣等。

十六日。龍、又来訪す。余、小室・稻垣等を訪ぬ。

四月一七日

十七日。訪領事館及水川等。為平林饗。大醉帰。会陽昂民<sup>(1)</sup>来訪。書字贈蘇杭等。

十七日。領事館及び水川等を訪ぬ。平林に饗せらる。大醉して帰る。陽昂民の来訪するに会す。字を書して蘇杭等に贈る。

(1)「民」の下に「帰」の一字があつたが削除されている。

四月一八日

十八日。林朝圻・李昂星二人来訪。林進士、広西人。李孝人、四川人。

十八日。林朝圻・李昂星の二人来訪す。林進士は、広西人なり。李孝人は、四川人なり。

四月一九日

十九日。曇而不雨。夜、井上某来訪。斯文学会生徒。現住芝桜馬街号晚翠堂。

十九日。曇れども雨ふらず。夜、井上某来訪す。斯文学会

の生徒なり。現<sup>いま</sup>は芝桜馬街号晚翠堂に住す。

四月二〇日

二十日。夜、為田鍋某所招、飲於徐園。見成田安輝。住四川二年云。

二十日。夜、田鍋某の招く所と為り、徐園に飲す。成田安輝に見ゆ。四川に住すること二年と云ふ。

四月二一日

二十一日。曇且雨。使僮阿玉抵商務印刷館、送致西学探源<sup>(1)</sup>開港四葉。不違而帰。

二十一日。曇り且つ雨ふる。僮阿玉をして商務印刷館に抵り、『西学探源』『開港四葉』を送致せしむ。違はずして帰る。(1)「致」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

四月二二日

二十二日。河瀬儀太郎送致洋金百円。其所出皆武昌官吏。訪米山庸義謝送致之勞。贈山楂糕・二十錢。

二十二日。河瀬儀太郎、洋金百円を送致す。其の出づる所は皆武昌官吏なり。米山庸義を訪ね送致の勞を謝す。山楂糕・二十錢を贈る。

四月二三日

二十三日。抵商務印刷館督印刷。

二十三日。商務印刷館に抵りて印刷を督す。<sup>うなが</sup>

四月二十四日

二十四日。改正哲学綱要上巻卒業。

二十四日。『改正哲学綱要上巻』、業を卒ふ。

四月二十五日

二十五日。訪方燕廉、交哲学上巻。督鉄鞭于葉某。帰草学校一篇。<sup>(1)</sup>

二十五日。方燕廉を訪ね、『哲学上巻』を交す。『鉄鞭』を葉某に督す。<sup>うなが</sup> 歸りて『学校』一篇を草す。

(1)「訳」を墨筆にて「草」に改めてある。

四月二十六日

二十六日。夜、送稲垣・竹山二子帰長崎。見饗酔而帰、不能送。

二十六日。夜、稲垣・竹山二子の長崎に帰るを送る。饗せられて酔ひて帰り、送るあたはず。

四月二十七日

二十七日。訪方燕廉、不逢而帰。会葉送還鉄鞭。失梁鼎菜題字二枚。

二十七日。方燕廉を訪ぬるも、逢はずして帰る。葉に会して『鉄鞭』を送還せしむ。梁鼎菜の題字二枚を失す。

四月二十八日

二十八日。午前八時、抵植木号、觀許・袁・□三氏葬式。

二十八日。午前八時、植木号に抵り、許・袁・□の三氏の葬式を觀る。

四月二十九日

二十九日。連某与三多同來訪。連住華文報館。<sup>(1)</sup> 三多住四馬路鼎陞棧楼上三十三号。

二十九日。連某と三多と同に來訪す。連は華文報館に住す。三多は四馬路鼎陞棧楼上三十三号に住す。

(1)「田」を墨筆にて「連」に改めてある。これにより、冒頭も「田某」に作っていたが、「連某」に改めた。

四月三十日

三十日。

三十日。

五月一日

五月一日。為牧浪所招、飲於杏花樓。<sup>(1)</sup> 見新井某。

五月一日。牧浪の招く所と為り、杏花樓に飲す。新井某に見ゆ。

(1)「杏花」は、墨筆にて行間に加えられたものである。



五月二日

二日。連某与三多来。

二日。連某と三多と来る。

五月三日

三日。鈴木元亮来自杭。

三日。鈴木元亮、杭より来る。

五月四日

四日。送白岩龍平帰国、到伝愛号船。訪土居純橘于鳳陽館。見新井。

四日。白岩龍平の国に帰るを送り、伝愛号船に到る。土居純橘を鳳陽館に訪ぬ。新井に見ゆ。

五月五日

五日。大久保某帰自天津来見。

五日。大久保某、天津より帰りて来り見ゆ。

五月六日

六日。無事。校倉志門條。招店老使飲。小林飲茶称乾杯。自七日至二十八日、専事著述、不能記事。

六日。事なし。校倉志門條。店老を招きて飲ましむ。小林、茶を飲みて乾杯と称す。七日より二十八日に至るまで、著述に専事し、事を記すあたはず。

五月二八日

二十八日。西学探源告成。<sup>(1)</sup>喜甚。此日同門滬報学校、行開業式于桂野里。見招。見子爵長岡護美・根津一・菊池某等。

二十八日。『西学探源』告成す。喜び甚だし。此の日、同門の滬報学校、開業式を桂野里に行ふ。招かる。子爵長岡護美・根津一・菊池某等に見ゆ。

(1)「告成」は朱筆にて行間に加えられたものである。

五月二七日

二十七日。<sup>(1)</sup>訪牧・松林、示探源。訪藤沢元・結城琢于鳳陽館。此日商務館送致探源三百部。

二十七日。牧・松林を訪ね、『探源』を示す。藤沢元・結城琢を鳳陽館に訪ぬ。此の日、商務館、『探源』三百部を送致す。

(1)「九」を朱筆にて「七」に改めてある。

五月二八日

二十八日。<sup>(1)</sup>午前、結城琢来。贈探源一部。及藤沢。此夜為日本教会所招、飲於徐家園。贈一部于会。及長岡。及滬報井手氏。

二十八日。午前、結城琢来る。『探源』一部を贈る。藤沢に及ぼす。此の夜、日本教会の招く所と為り、徐家園に飲す。一部を会に贈る。長岡に及ぼす。滬報の井手氏に及ぼす。

(1)「三十」を朱筆にて「二十八」に改めてある。

五月三〇日

三十日<sup>(1)</sup>。杭人蔡某來訪。結城氏介之也。贈探源一部。

三十日。杭人蔡某來訪す。結城氏の之を介するなり。『探源』一部を贈る。

(1)「十」の下に「一」の一字があつたが削除されている。

六月一日

六月一日。商務館送致探源七百部。因托五十部于領事、五十部于水川售売■。

六月一日。商務館、『探源』七百部を送致す。因りて五十部を領事に、五十部を水川に托して■に售売せしむ。

五月三十一日

三十一日。送致五十部于白岩、又五十部于牧・松村・井手・金粟齋。

三十一日。五十部を白岩に、又五十部を牧・松村・井手・金粟齋に送致す。

六月三日

三日。訪稻村・井上三子。贈附探源一部。遇成田安輝來訪。又贈一部。安輝今住三馬路画錦里益豐棧。

三日。稻村・井上三子を訪ぬ。『探源』一部を贈附す。成田安輝の來訪せしに遇ふ。又一部を贈る。安輝は今、三馬路画錦里の益豐棧に住す。

六月四日

四日。鈴木元英來、持一部去。併前二部矣。

四日。鈴木元英來り、一部を持して去る。前と併せて二部なり。

六月五日

五日。熊本増持五十部去。托鄭玉書。前既贈一部于玉書。夜作書贈菊池謙二郎。併一部。借金。明日返書、辞貸金、投五円來。

五日。熊本増、五十部を持して去る。鄭玉書に托す。前に既に一部を玉書に贈る。夜、書を作りて菊池謙二郎に贈る。併せて一部。金を借る。明日返書し、金を貸すを辞して、五円を投じて来る。

六月六日

六日。陽鼎民來訪。贈一部。

六日。陽鼎民來訪す。一部を贈る。

六月二三日

二十二日。鉄鞭告成。抵商務館、訪關係印刷者。其幹事務者夏瑞芳。任校正者艾珊孫及蔡韻濤。其排字者吳長根。艾氏上海惟一家世代讀書云。自六日至此、專為鉄鞭勞。嘗遇結城琢拉杭人蔡元培來。贈探源一。又贈藤沢元。托之贈西村生。在南京。又贈稻垣・竹山二人各二部。

二十二日。『鉄鞭』告成す。商務館に抵り、印刷に關係せし者を訪ぬ。其の事務を幹せし者は夏瑞芳。校正に任せし者は艾珊孫及び蔡韻濤。其の字を排せし者は吳長根。艾氏は上海惟だ一家の世々代々書を読むと云ふ。六日より此に至るまで、専ら『鉄鞭』の勞を為す。嘗て結城琢の杭人蔡元培を拉きて来るに遇ふ。『探源』一を贈る。又藤沢元に贈る。之に托して西村生に贈る。南京に在り。又稻垣・竹山二人に各二部を贈る。

六月二三日

二十三日。徵樂善堂内。人姓名郷貫、曰、朱鳳章、寧波人。曰、盛雋卿・荷卿兄弟、寧波人。曰、黃倬雲、蘇州人。為滬報客夜來泊此。曰、袁阿玉、曰、姜夏笙、並寧波人。為僮供使令。

二十三日。樂善堂内に徵せらる。人の姓名郷貫は、曰く、朱鳳章、寧波人。曰く、盛雋卿・荷卿兄弟、寧波人。曰く、黃倬雲、蘇州人。滬報の客たりて夜來り此に泊す。曰く、袁阿玉、曰く、姜夏笙、並びに寧波人。僮供使令たり。

(1)「曰」は、墨筆で行間に加えられたものである。

六月二十四日

二十四日。商務館送致鉄鞭三百部。因贈一部于岡田・松林・水川・小田切・井手、二部于牧。請借金。

【頭注】訪稻垣氏。談一時。聞其婿竹内某、住神戸加納町二丁

目廿五番屋敷元梅林角三井銀行杜宅。

二十四日。商務館、『鉄鞭』三百部を送致す。因りて一部を岡田・松林・水川・小田切・井手に、二部を牧に贈る。借金を請ふ。

【頭注】稻垣氏を訪ぬ。談ぜしこと一時。其の婿の竹内某の神戸加納町二丁目廿五番屋敷元梅林角の三井銀行杜宅に住するを聞く。

六月二十五日

二十五日。商務館送致鉄鞭六百九十三部。

二十五日。商務館、『鉄鞭』六百九十三部を送致す。

六月二十六日

二十六日。訪方燕廉・文廷。胡惟仲・汪■琬。贈鉄鞭各一部。於成田安輝及朱燕生亦然。方交附墨銀七十元於夏瑞芳。

二十六日。方燕廉・文廷・胡惟仲・汪■琬を訪ぬ。『鉄鞭』各一部を贈る。成田安輝及び朱燕生に於けるも亦た然り。方に墨銀七十元を夏瑞芳に交附す。

(1)「二」を墨筆にて「六」に改めてある。

六月二十七日

二十七日。托附鉄鞭一百部于中外日報售売。托鉄鞭十部。探源五部王芝、献于朝。王芝、字子石。子、四川成都府華陽

県人。長子王思、字仰思。四川成都府成都府附学生。寓上海

英租界三洋涇橋新大方棧十八号。

二十七日。『鉄鞭』一百部を中外日報に托附して售売せしむ。『鉄鞭』十部・『探源』五部を王芝に托して、朝に献ず。王芝、字は子石。子は四川成都府華陽県の人なり。長子の王思は、字は仰思。四川成都府成都県附学生なり。上海英租界の三洋涇橋新大方棧十八号に寓す。

(1)「交」を墨筆にて「托」に改めてある。

六月二十八日

二十八日。贈鉄鞭百五十部・探源五十部・孝経百部於河瀬氏、鉄鞭・孝経各百五十部<sup>①</sup>于伊藤、鉄鞭・探源各二十五部于重慶山崎氏、二部于林琴。為長岡子爵所饗。亦為方燕廉招。獲探源代価三円。此日、小田切・水川・牧・白岩・松林・菊池・吉田・井手・稲村九人、贈余以■。各八元。

二十八日。『鉄鞭』百五十部・『探源』五十部・『孝経』百部を河瀬氏に、『鉄鞭』『孝経』各百五十部を伊藤に、『鉄鞭』『探源』各二十五部を重慶の山崎氏に、二部を林琴に贈る。長岡子爵の饗する所と為る。亦た方燕廉に招かる。『探源』の代価三円を獲。此の日、小田切・水川・牧・白岩・松林・菊池・吉田・井手・稲村の九人、余に贈るに■を以てす。各おの八元。

(1)「五」は墨筆で行間に加えられるものである。

六月二十九日

二十九日。発上海。与長岡子爵・牧放浪等同。

二十九日。上海を発す。長岡子爵・牧放浪等と共にす。

七月二日

七月二日<sup>①</sup>。達広島。船中始知中西・桑田諸子。自福建学舎来云。又逢林某。郵便会社上海支部長也。

七月二日。広島に達す。船中、始めて中西・桑田諸子を知る。福建学舎より来ると云ふ。又林某に逢ふ。郵便会社上海支部長なり。

(1)「三」を墨筆にて「二」に改めてある。

七月四日

七月四日<sup>①</sup>。谷芳、招斎藤・高島庫父司<sup>②</sup>・森田・増田諸人于西福院、招饗。夜、安芸本吾来訪。

七月四日。谷芳、斎藤・高島庫父司・森田・増田の諸人を西福院に招き、饗に招く。夜、安芸本吾来訪す。

(1)「五」を墨筆にて「四」に改めてある。

(2)「庫父司」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

七月七日

七月七日。在浪花。訪伊藤介夫・桑山国五郎。為二人与岡野某所饗于清水某<sup>②③</sup>。介夫在第五学校任事務云。夕訪中橋徳五郎<sup>④</sup>。見藤本某・芳川氏贅夫<sup>④</sup>。余遇大和田胤修。為大坂商船株

式会社社員。現任台南丸事務長云。

七月七日。浪花に在り。伊藤介夫・桑山国五郎を訪ぬ。二人と岡野某との清水某に饗する所と為る。介夫は第五学校に在りて事務に任ずと云ふ。夕、中橋徳五郎を訪ぬ。藤本某・芳川氏贅夫に見ゆ。余、大和田胤修に遇ふ。大坂商船株式会社社員たり。現は台南丸事務長に任ずと云ふ。

- (1)「某」の下に「与」の一字があつたが削除されている。  
 (2)「于清水」は、墨筆にて行間に加えられたものである。  
 (3)「某」の下に「与」の一字があつたが削除されている。  
 (4)「見藤本。芳川氏贅夫」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

七月八日

八日。訪書肆中井善吉。善吉来談三木某。

八日。書肆中井善吉を訪ぬ。善吉来りて三木某と談ず。

七月二十六日

二十六日。小松崎来訪。聞錢恂在三田綱町一番地。

二十六日。小松崎来訪す。錢恂の三田綱町一番地に在ると聞く。

十二月

十二月。為佐々木安五郎所薦、為川嶋浪速食客。<sup>①</sup>又約抵清国。<sup>②</sup>

十二月。佐々木安五郎の薦むる所と為りて、川嶋浪速の食客と為る。又清国に抵るを約す。

(1)「為」を墨筆にて「■為」に改めてあるが、さらに「■」の一字が削除されている。

(2)「約」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

十二月二日

廿一日。発京。送行者、有四宮・桂、及同郷書生二三人。

廿一日。京を発す。行くを送る者、四宮・桂、及び同郷書生二三人あり。

十二月二日

廿二日。夜、投広島材木町谷芳之許。芳余族人也。

廿二日。夜、広島材木町の谷芳の許に投ず。芳は余の族人なり。

十二月二四日

二十四日。夜談及家光。芳曰、郷里三谷村、有八幡宮。久保氏所勸。請而衆奉之。<sup>①</sup>其祭日非久保氏往祭、則神輿不敢出宮。妙見宮、谷氏所奉。非谷氏出拝、則輿不敢出宮。城田宮、塩田氏所斎。非塩田氏出祭、則神輿不敢出宮。妙見宮北隣方<sup>②</sup>

田若干畝。属宮為一。土谷氏<sup>(3)</sup>祖先、伝襲遇家屢空。請久保氏借銀<sup>(4)</sup>抵其地為本。銀戾遂讓与<sup>(5)</sup>之也。其南隣数町歸他人者亦然。谷氏家章用橘花。代章用桐。出楠氏<sup>(6)</sup>墓石累々。用船形。蓋古式為然。小山田<sup>(7)</sup>族人有詐称須者。谷氏称之名子<sup>(8)</sup>、而族人争之經久。其下人有弥吉等。谷氏南隣有野川鶴藏。自称馬一匹牛一匹下人五人。留数日。見前田貞次郎・宮本正貫・龍口了信。二十四日。夜、談、家光に及ぶ。芳曰く、郷里の三谷村に、八幡宮あり。久保氏の勸する所なり。請ひて衆之を奉る。其の祭の日、久保氏の祭に往くに非ざれば、則ち神輿敢て宮より出でず。妙見宮は、谷氏の奉ずる所なり。谷氏の出拝するに非ざれば、則ち輿敢て宮より出でず。城田宮は、塩田氏の齋する所なり。塩田氏の祭に出づるに非ざれば、則ち神輿敢て宮より出でず。妙見宮の北隣方に田若干畝あり。宮に属すること一たり。土谷氏の祖先、伝襲して家に遇するも屢しば空しくす。久保氏に請ひて銀を借りて其の地に抵り本と為さしむ。銀戾りて遂に之を譲与するなり。其の南隣数町の他人に歸する者も亦た然り。谷氏は家章に橘花を用ふ。代章に桐を用ふ。楠氏に出づれば、墓石累々たり。船形を用ふ。蓋し古式然りと為す。小山田の族人に詐りて須と称する者あり。谷氏之を名子<sup>(8)</sup>と称し、族人の之を争ふこと久しきを経。其の下人に弥吉等あり。谷氏の南隣に野川鶴藏あり。自ら馬一匹・牛一匹・下人五人と称す。留ること数日。前田貞次郎・宮本正貫・龍口了信に見ゆ。

(1)「之」の下に「■」の一字があつたが、削除されてい

る。

(2)「方」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(3)「氏」の下に「祖氏」の二字があつたが、削除されている。

(4)「銀」の下に「為」の一字があつたが、削除されている。

(5)「代章用桐」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(6)「氏」の下に「云」の一字があつたが、削除されている。

(7)「小山田」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(8)「久」の下に「云北氏」の三字があつたが、削除されている。

(9)「其下」より「谷氏」に至るまで、墨筆にて行間に加えられたものである。

一二月二九日

二十九日。前田・宮本等諸子、為余設饗于大和楼<sup>(1)</sup>。会者、後藤静夫・桐原恒三郎・商業会頭<sup>(2)</sup>。長沼鷺藏・旅舎<sup>(3)</sup>。橋本実郎・前田ノ次<sup>(4)</sup>。龍口了信。山中正雄<sup>(5)</sup>・谷<sup>(6)</sup>。伴資健<sup>(7)</sup>。市長<sup>(8)</sup>。松公平<sup>(9)</sup>・助役<sup>(10)</sup>。保田某<sup>(11)</sup>。森田某<sup>(12)</sup>。村上英省<sup>(13)</sup>。書紀<sup>(14)</sup>。正午来合、至三時乃散。是日、早詣多家神社。得三絶句。曰、天草名吟一世宗、耶麻好語四方恭、咄哉吾党子成子、坐使神人泯旧蹤。蓋山陽集中未有一言及反家宮也。其二曰、

神蹤自古口碑紛、為是車徒屢若雲、松栗栽山随处徧、自家長計属無聞。蓋土人爭神跡非無謂然。未如栽樹自保也。其三日、崇神不在■金多、畢竟金多自衆和、土俗明禪天意熹、行看海陸六龍過。蓋土人謀營多稼營広。金二十万云。

二十九日。前田・宮本等の諸子、余の為に饗を大和楼に設く。会せし者は、後藤静夫・桐原恒三郎・商業会頭・長沼鷺藏―旅舎―橋本実郎―前田ノ次―龍口了信・山中正雄―谷■―伴資健―市長―松公平―助役―保田某・森田某・村上英省―書紀―なり。正午来り合し、三時に至りて乃ち散ず。是の日、早く多家神社に詣る。三絶句を得。曰く、

天草名吟一世宗、天草 名吟 一世の宗

耶麻好語四方恭、耶麻 好語 四方恭す

咄哉吾党子成子、咄なる哉 吾が党の子成子

坐使神人泯旧蹤。坐 神人をして旧蹤を泯さしむ

蓋し山陽集中、未だ一言も家宮に反るに及ぶものあらざるなり。其の二に曰く、

神蹤自古口碑紛、神蹤 古より口碑紛す

為是車徒屢若雲、是が為に車徒屢しば雲の若し

松栗栽山随处徧、松栗 山に栽え 随处に徧し

自家長計属無聞。自家の長計 無聞に属す

蓋し土人は、神跡を争ひて然りと謂ふことなきにしも非ず。未だ栽樹して自ら保つに如かざるなり。其の三に曰く、

崇神不在■金多、崇神は■金の多きに在らず

畢竟金多自衆和、畢竟 金多ければ 自ら衆和す

土俗明禪天意熹、土俗の明禪 天意熹ぶ  
行看海陸六龍過。行きて海陸六龍の過ぐるを見る  
蓋し土人は、謀は多きを営り、稼は広きを営る。金二十万と云ふ。

(1)「于大和楼」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「如何」を墨筆にて「咄哉」に改めてある。

(3)「蓋山」より「宮也」に至るまで、墨筆にて行間に加えられたものである。

(4)「轡輿」を墨筆にて「車徒」に改めてある。

(5)「合羣」を墨筆にて「若雲」に改めてある。

(6)「瞻禱」を墨筆にて「長計」に改めてある。

(7)「蓋土」より「保也」に至るまで、墨筆にて行間に加えられたものである。

(8)原文は「■」に作るが、文意により「稼」に改めた。

明治三十五年一月一日

三十五年一月。川徳氏一行、尽会于広島大手町長沼客棧。凡七人。戲称七福神。

三十五年一月。川徳氏一行、尽く広島大手町の長沼客棧に会す。凡そ七人。戯れて七福神と称す。

一月二日

二日。発広島。送者、有谷芳母子、前田・増田二人。船中

見陸軍工兵中佐大久保徳明。得一絶向曰、峯青渚白多陽天、  
鷓首凝眸想総戎、解纜云何帰棹日、寧知四海愜心同。

二日。広島を發す。送りし者は、谷芳母子、前田・増田の  
二人あり。船中、陸軍工兵中佐大久保徳明に見ゆ。一絶を得  
て向ひて曰く、

峯青渚白多陽天、 峯は青く渚は白く陽天多し

鷓首凝眸想総戎、 鷓首は眸を凝して戎を総ぶるを想ふ

解纜云何帰棹日、 纜を解きて何をか云はん帰棹の日

寧知四海愜心同。 寧ぞ知らん 四海 愜心同じきを

### 一月三日

三日。過赤馬関。曰、傍觀幾歳等、間過碧橫行、感慨多壯  
士、岸巔連砲壘。纜教黠虜誓無佗。

三日。赤馬関を過ぐ。曰く、

傍觀幾歳等、 傍觀すること幾歳等

間過碧橫行、 間過ぐ 碧横の行

感慨多壯士、 感慨 壯士多し

崖巔連砲壘。 崖巔 砲壘を連ぬ

纜に黠虜をして佗なきを誓はしむ。

(1)「巖」を墨筆にて「連」に改めてある。

(2)「令」を墨筆にて「教」に改めてある。

### 一月四日

四日。過玄海。獲一絶。

【頭注】曰、拔地冲天碧浪狂、人々吐沫異屍横、双瞳陷没  
纜分睫、尚勝登楼望月黄。

四日。玄海を過ぐ。一絶を獲。

【頭注】曰く、

拔地冲天碧浪狂、 地を抜き 天に沖ぶ 碧浪の狂

人々吐沫異屍横、 人々吐沫し 異屍横たはる

双瞳陷没纜分睫、 双瞳陷没 纜に 睫を分つ

尚勝登楼望月黄。 尚ほ勝へて登楼す 望月黄なり

(1)「過玄海獲一絶」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「疾霆轟」を墨筆にて「碧浪狂」に改めてある。

(3)「人」を墨筆にて「夫」に改めてあったが、削除されて  
いる。

(4)「望」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(5)「眩人」を墨筆にて「黄」に改めてある。また、枠外に  
「眉毛倒」とあるが、どの部分の訂正なのか判別し難い。

### 一月五日

五日。過朝鮮海。獲四絶句。曰、欲住鷄林未有縁、樓船忽  
過濟州辺、看他海嶽皆庸瑣、知得天公不我捐。曰、人■不閱  
地勢非、一心能使百靈依、仲尼欲曷東夷陋、応慨前王画九畿。  
曰、東夷九種是仙洲、緬想五山空際浮、地火揚炎輿嶠陷、洋  
中方現息津州。一壱岐是息、对馬是津島。自古伝有此説一曰、  
三韓古説九州同、一九州唱筑紫九国。韓人古説、漢江以南、古



与对馬<sup>(2)</sup>壹岐九州<sup>(3)</sup>為一。九州亦云爾——何翅<sup>(4)</sup>贏劉訖太東、不管神明連合切、人間悠作鷓蚌攻。

五日。過旅順。洋有。連天高壘不禁顰、可忍神京委陸沈、漢北風沙無限惡、能提一旅有何人。

五日。朝鮮海を過ぐ。四絶句を獲。曰く、

欲住鷓林未有縁、鷓林に住せんと欲するも未だ縁あらず

樓船忽過濟州辺、樓船 忽ち過ぐ 濟州の辺

看他海嶽皆庸瑣、看他<sup>み</sup>よ 海嶽 皆 庸瑣

知得天公不我捐、天公の我を捐てざるを知り得

曰く、

人■不閱地勢非、人■ 地勢の非なるを閱せず

一心能使百靈依、一心 能く百靈をして依らしむ

仲尼欲曷東夷陋、仲尼 曷<sup>いかん</sup>せんと欲す 東夷の陋

応慨前王画九畿、応に前王の九畿を画するを慨<sup>かな</sup>くべし

曰く、

東夷九種是仙洲、東夷 九種 是れ仙洲

緬想五山空際浮、緬想す 五山の空際に浮ぶを

地火揚炎輿嶠陷、地火 炎を揚げ 輿嶠陷れ

洋中方現息津州、洋中<sup>まさ</sup>方に現はる 息・津州

一壹岐は是れ息、对馬は是れ津島。古伝より此の説あり——

曰く、

三韓古説九州同、三韓 古説 九州同じ

——九州は筑紫九国と唱す。韓人の古説に、漢江以南は、古、对馬・壹岐・九州と一たり。九州も亦た爾と云ふ——

何翅贏劉訖太東、何ぞ翅<sup>た</sup>に贏劉の太東に訖<sup>ほ</sup>るのみならんや

不管神明連合切、管せず 神明 連合の切  
人間悠作鷓蚌攻。人間 悠として鷓蚌の攻<sup>な</sup>を作す

五日。旅順を過ぐ。洋に有りて、

連天高壘不禁顰、連天の高壘 顰<sup>しか</sup>むるを禁せず

可忍神京委陸沈、神京の陸沈に委ぬるを忍ぶべし

漢北風沙無限惡、漢北 風沙 無限の惡

能提一旅有何人。能く一旅に提す 何人かあらん

(1) 原文は「白」に作るが、文意により「自」に改めた。

(2) 「島」を墨筆にて「馬」に改めてある。

(3) 原文は「伎」に作るが、文意により「岐」に改めた。

(4) 「直是」を墨筆にて「何翅」に改めてある。

(5) 「雲」を墨筆により「天」に改めてある。

一月六日

六日。達山海関。曰、炎風廿有八年前、屈指更程按靖辺、乱後氷湾投火舶、驚聞碧眼躍崖巔。

六日。山海関に達す。曰く、

炎風廿有八年前、炎風 廿有八年前

屈指更程按靖辺、指を屈して更に程す 按靖の辺

乱後氷湾投火船、乱後 氷湾 火船を投じ

驚聞碧眼躍崖巔。驚き聞く 碧眼 崖巔に躍ると

(1)「維」を墨筆により「投」に改めてある。

一月八日

八日。発山海関。赴天津、在北京。在駐車場、見各国兵。

兵衆異同。<sup>(3)</sup>衆謂是兵隊競進会也。獲一絶曰、各種衣装映日紅、<sup>(4)</sup>街佇立語表和衷、<sup>(5)</sup>誰知万里西来客、<sup>(6)</sup>自有貪風寇域中。<sup>(7)</sup>所見曰、<sup>(8)</sup>此郷不与我邦同、<sup>(9)</sup>到处人烟四至通、<sup>(10)</sup>謂是風光非往昔、<sup>(11)</sup>郊原满目思無窮。過天津作云、一代名流李相公、天津甲第噪中東、<sup>(12)</sup>可憐拳世無男子、<sup>(13)</sup>空見多金喚俊雄。<sup>(14)</sup>又曰、赫赫威權庄九辺、<sup>(15)</sup>維公将相卅余年、<sup>(16)</sup>那知屍骨終藏日、<sup>(17)</sup>乃有東隣丹歎宣。<sup>(18)</sup>

八日。山海関を發す。天津に赴きて北京に在り。駐車場に在りて、各国の兵を見る。兵衆異同あり。衆、是を兵隊競進会と謂ふなり。一絶を獲て曰く、

各種衣装映日紅、各種の衣装 日に映えて紅なり  
街佇立語表和衷、街に佇立して語り 和衷なるを表す  
誰知万里西来客、誰か知る 万里西来の客  
自有貪風寇域中、自ら貪風寇域の中にあるを

見し所ありて曰く、

此郷不与我邦同、此の郷 我が邦と同じからず  
到处人烟四至通、到处 人烟四至通ず  
謂是風光非往昔、謂ふ 是れ 風光 往昔に非ずと  
郊原满目思無窮。郊原 满目 思ひ窮まりなし

天津を過ぐ。作りて云く、

一代名流李相公、一代の名流 李相公

天津甲第噪中東、天津の甲第 噪中東

可憐拳世無男子、憐むべし 世を挙げて男子なきを

空見多金喚俊雄。空しく見る 多金の俊雄を喚ぶを

又曰く、

赫赫威權庄九辺、赫赫たる威權 九辺を圧す

維公将相卅余年、維公 将相 卅余年

那知屍骨終藏日、那ぞ知らん 屍骨 終藏の日

乃有東隣丹歎宣。乃ち東隣丹歎の宣あり

(1)「天津在」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(2)「兵」の下に「衆」の一字があつたが、削除されている。

(3)「兵衆異同」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(4)「国或」を墨筆にて「種衣」に改めてある。

(5)「各異同」を墨筆にて「映日紅」に改めてある。

(6)「翩翩影映晚嫩紅」墨筆にて「街□佇立翺說康功」に改め、さらに「街□」の「□」を削除し、「翺說康功」を「語表和衷」に改めてある。

(7)行間に墨筆にて「双鷺單鷹侶」とあるが、削除されている。

(8)「貪」は、墨筆にて行間に加えられたものである。

(9)「神不普通」を墨筆にて「寇域中」に改めてある。

(10) 「所」の上に「途中」の二字があつたが、削除されている。

(11) 「平原」を墨筆にて「此郷」に改めてある。

(12) 「日東」を墨筆にて「我邦」に改めてある。

(13) 「路」を墨筆にて「至」に改めてある。

(14) 「山河」を墨筆にて「郊原」に改めてある。

(15) 「徒」を墨筆にて「空」に改めてある。

(16) 「壯」を墨筆にて「俊」に改めてある。

(17) 「烈烈」を墨筆にて「赫赫」に改めてある。

(18) 「風」を墨筆にて「樞」に改めてある。

(19) 「寸志」が墨筆にて「丹歎」に改めてある。

(20) 行間に「誼」の一字があつたが、削除されている。

一月九日

九日。住天津芙蓉館。見川島細君妹夫。夫婦鹿兒島豪家、在此交易、耗幾分云。賦詩似姉妹曰、<sup>①</sup>惋容堪屈碧瞳群、長配清流次世勲、福可賀兮功可賞、<sup>②</sup>伝家真宝<sup>③</sup>儉兼勤。又獲一絶。由其商業有<sup>④</sup>覺曰、<sup>⑤</sup>合佗衆力博多金、只自丁寧<sup>⑥</sup>鸞雜珍、永世万年數大信、邦家至計在如今。

九日。天津の芙蓉館に住す。川島細君の妹夫に見ゆ。夫婦は鹿兒島の豪家にして、此に在りて交易し、幾分を耗すと云ふ。詩を賦して姉妹に似せて曰く、

惋容堪屈碧瞳群、 惋容 屈に堪ゆ 碧瞳の群  
長配清流次世勲、 長配清流は次世の勲

福可賀兮功可賞、 福は賀すべく功は賞すべし  
伝家真宝儉兼勤。 伝家の真宝 儉と勤と  
又一絶を獲。其の商業の覺あるに由りて曰く、

合佗衆力博多金、 佗衆の力を合するは博多の金  
只自丁寧鸞雜珍、 只だ自ら丁寧に<sup>ひき</sup>雜珍を<sup>ひき</sup>鸞ぐのみ  
永世万年數大信、 永世 万年 大信を敷き  
邦家至計在如今。 邦家の至計は如今に在り

(1) 「良計」を墨筆にて「真宝」に改めてある。

(2) 「抛」を墨筆にて「合」に改めてある。

(3) 「些利」を墨筆にて「衆力」に改めてある。

(4) 「在紛煩」を墨筆にて「自丁寧」に改めてある。

(5) 「計」の下に「称」の一字があつたが、削除されている。

一月一〇日

十日。与川島氏抵守備隊長秋山<sup>①</sup>。領事官伊集院許。抵正金銀行見羽黒<sup>②</sup>、為其饗。此日聞西兵無狀。有所感、賦一詩曰、<sup>③</sup>団匪大起是耶非、一概呼匪自力微、請看<sup>④</sup>單鷹双鷺侶、街頭劫奪毒拳揮。聞我国少輩在此者、動有滋擾主事之虞、曰、猶有迂儒慕陋風、又逢碧眼嫉交通、日東才子勿輕拳、恐使良朋疑日東。<sup>⑤</sup>此後余抵北京住北島氏。<sup>⑥</sup>就居。又住黑芝麻胡同<sup>⑦</sup>家中、後移廠橋口善隣学堂、為校長兼新書局長。

十日。川島氏と守備隊長秋山<sup>①</sup>・領事官伊集院<sup>もと</sup>の許に抵

る。正金銀行に抵りて羽黒□□に見え、其の饗を為す。此の日、西兵の状なきを聞く。感ずる所ありて、一詩を賦して曰く、

団匪大起是耶非、  
團匪の大起 是か非か  
一概呼匪自力微、  
一概 呼匪す 自力の微なるを

請看单鷹双驚侶、  
請ふ看よ 单鷹双驚の侶  
街頭劫奪毒拳揮、  
街頭 劫奪の毒拳揮ふ

我が国の少輩の此に在る者の、動もすれば滋擾主事の虞ありと聞きて、曰く、

猶有迂儒慕陋風、  
猶ほ迂儒の陋風を慕ふあり  
又逢碧眼嫉交通、  
又 碧眼に逢ひて交通を嫉む

日東才子勿輕拳、  
日東の才子 輕拳する勿れ  
恐使良朋疑日東、  
良朋をして日東を疑はしむるを恐る

□□。此の後、余、北京に抵りて北島氏に住す。□□□□居を蹴る。又、黒芝麻胡同□□□□家中に住す。後、廠橋口の善隣学堂に移り、校長兼新書局長と為る。

(一)「此日」より「無状」に至るまで、墨筆にて行間に加えられるものである。

七月三日

三日。東帰。

三日。東帰す。

七月二十四日

二十四日。赴北海道。

自札幌・長沼・上川、経下富良野、抵十勝。省親訪旧、以九月六日帰京。獲詩数十百首。

二十四日。北海道に赴く。

札幌・長沼・上川より、下富良野を経て、十勝に抵る。親を省み旧を訪ね、九月六日を以て京に帰る。詩数十百首を獲。

上海河南路樂善堂寄托書籍

増補新撰文語粹金・近藤元粹著 一大冊

国民報・第一期 国民報社発行 一冊・汪徳民贈

行政学・有賀長雄講述 一冊

理財学・荒井甲子三郎著 一冊

新体万国歴史・大和田建樹著 二冊・上中

動物学新書・八田三郎編纂 富山房 一冊

訳林・第一期 一冊

理財学・山本兼太郎述 一冊

商法総則・法学士志田鉀太郎述 一冊

国家学原理・文学士高田早苗講述 一冊

経済学・和田垣謙三郎講義 田中文蔵編輯 一冊

民情一新・福沢諭吉著 一冊

民法総論・岡松参太郎講義 完大冊

会社法・法学士水野鍊太郎述	一大冊
法学通論・一名法学初步 時習社発兌	全
金融論・文学士浜田健二郎講述	一冊
教育学・立花銑三郎講述	全
仏教大意・釈雲照著	全
馬來半島事情・二宮峰男著	一冊
支那現情・長江子編	一冊
為替論・文学士天野為之講義	一冊
國際公法・石川法学士著	一冊
殖民論・恒屋盛服君著 博聞社蔵板	一冊
教授法・大石兵藏著 博聞館蔵板	全
財政学講義・法学士高野岩三郎述	完
小学教育論・小泉信吉・四屋純三郎訳	一冊
倫理学新書・立花銑三郎訳述	一冊
物理学新書・富山房編輯	一冊
人生乃基礎・林稻州著	一冊
植物学新書・富山房編輯	全
民法全部・大沢勇編輯 鍾美堂発行	小大冊
西洋開化史・印書局印行 訳訳局訳述	全
博物一斑・農学士今村猛雄編 東京同文館	一冊
化学新書・第六編 富山房編輯	全
普通植物学教科書・理学士三好学編	全
政教中正論・岡本柳之助著	全
尽忠至孝・田中弘之著	全

万国公私権解・西沢之助著	全
中学校師範学校 農理学初步・文部編輯局	全
経済学粹・経済雑誌社刊行	全
法理学・伊国法律大学士パテルノストロ―講義	全
宮城浩蔵通訳	全
博物示教・浜田俊三郎著	全
百鍊乃鉄腸・山県玄浄著	全
東邦近世史・田中華一郎著	全
小憤慨録	全
野外要務令	全
妖怪百談	全
商法・東京昌林堂書店発売	全
洋学精彩	
人生ノ基礎○、支那現情○、新体万国史(大和田建樹・略読)、殖民論(恒屋盛服)、馬來半島志(後半八分)、小学教育論(小泉信吉)、倫理学新書(立花銑三郎・要中ノ説ニ淡シ)、初等教授法(大石兵藏・必要再読)、経済学完(和田垣謙三講義・必要再読)、国家学原理完(高田早苗講述・必要再読)	

# 人名索引

・年／月／日の順に記載してある。

・○○氏や○○某などの姓のみの表記の場合は、一括して表記した。  
 ・実際の登場人物以外の人名（○○の墓、○○の講義等）は削除した。

		あ	
		安芸本吾……	34 / 7 / 4
		吾妻兵治……	33 / 12 / 6 / 12 / 7 / 12 / 12
		秋葉猗堂……	33 / 11 / 6
		秋山……	35 / 1 / 10
		浅見省吾……	33 / 11 / 3 / 11 / 6 / 12 / 22
		浅見倫太郎……	33 / 11 / 14
		新井……	34 / 5 / 1 / 5 / 4
		安藤熊之介……	33 / 11 / 15
		安藤省軒……	33 / 11 / 20
		井上……	34 / 4 / 19 / 6 / 3
		井手三郎……	33 / 11 / 29 / 12 / 3
			34 / 2 / 7 / 5 / 28 / 5 / 31 / 6 / 24 /
		い	
		伊集院……	35 / 1 / 10
		伊藤……	34 / 6 / 28
		伊藤介夫……	33 / 11 / 21
			34 / 7 / 7
		伊藤賢道……	34 / 3 / 12 / 3 / 17 / 4 / 7
		石川舜台……	33 / 11 / 20

		う	
		岩下敏之……	33 / 11 / 15
		宇都宮……	33 / 12 / 13 / 12 / 16 / 12 / 19
		宇都宮五郎……	34 / 1 / 24
		内田哲太郎……	33 / 11 / 6
		江馬春熙……	33 / 11 / 15
		袁……	34 / 4 / 28
		袁阿玉……	34 / 6 / 23
		遠藤……	34 / 3 / 12
		小川平吉……	33 / 11 / 6 / 11 / 14
		小田切……	33 / 11 / 29 / 12 / 15
		小田切美寿之助	33 / 12 / 6
		え	
		稲村新六……	34 / 1 / 26 / 2 / 17 / 2 / 19 / 6 / 3
			33 / 11 / 30 / 12 / 7 / 12 / 14
		稲垣清三郎……	33 / 11 / 28 / 11 / 28 / 12 / 12 / 12 / 14
		石原……	34 / 3 / 30
		石塚左玄……	33 / 11 / 15
		石田正直……	33 / 12 / 14
		お	

小田切勇輔	33	12	6	12	9
小山田	34	12	24		
王得勝	33	12	30		
王	34	1	5		
王芝	34	6	27		
王思	34	6	27		
王惕斎	33	11	11	11	29
汪	33	12	13		
汪	34	1	28	2	16
汪■琬	34	6	26		
汪鳳卿	34	1	13		
汪鳳瀛	34	1	5		
汪穰卿	33	12	5		
汪德淵	33	12	9		
大石許世	33	11	22		
大河平隆則	34	3	14	3	16
大久保徳明	35	1	2		
大久保	34	5	5		
大瀧	34	1	19		
大瀧八郎	33	12	25		
大野千太郎	33	12	14		
大畑	33	11	3		
大原信	33	12	3		
大原武慶	33	12	25	12	26
				12	27
				12	30

## か

蒲生重章	33	11	3		
龜谷行	33	11	3		
龜川	34	3	29		
桂	34	12	21		
片山敏彦	34	2	1	2	2
片山	34	4	2		
艾珊孫	34	6	22		
夏瑞芳	34	4	12	4	13
瓜爾佳	34	3	28	6	22
置塩	33	11	6		
龍谷経丸	33	11	20		
岡部和一郎	33	12	26		
岡野	34	7	7		
岡野増次郎	33	12	18		
岡田幾三郎	34	1	4		
岡田	33	11	20		
岡田	34	6	24		
岡千仞	33	11	6		
太田代恒徳	33	11	15		
大和田胤修	34	7	7		
大原武慶の父	34	1	19	1	23
				15	16
				1	18
				1	19
				1	14

## く

桑山国五郎	33	11	21	34	7	7
桑田	34	7	2			
熊本増	34	6	5			
楠	34	12	24			
日下寛	33	11	3	11	6	12
陸実	33	11	29			22
久保	34	12	24			
	34	5	31			
金粟斎	33	12	5			
桐原恒三郎	34	12	29			
姜夏笙	34	6	23			
許	34	4	28			
北島	35	1	10			
岸田吟香	33	11	29			
岸	34	3	16			
菊池謙次郎	34	5	6	6	5	6
木野村正徳	33	12	24	12	26	
木下健太	34	1	18			
河瀬光成	34	1	16			
河瀬儀太郎	33	12	29	4	22	6
川島	35	1	9	1	10	
川徳	35	1	1			
葭谷	33	11	18			

## き

## さ

蔡元培	34	6	22			
蔡韻濤	34	6	22			
蔡二源	34	4	2			
蔡	34	5	30			
佐々木安五郎	34	12				
	34	1	26			
佐々木洋行	33	11	24	11	25	
近藤広蔵	34	3	31			
黄倬雲	34	6	23			
呉長根	34	6	22			
呉元愷	33	12	30			
後藤静夫	34	12	29			
	34	4	16			
小室三吉	33	11	30	12	1	
小松崎茂助	33	11	15			
小松崎	34	7	26			
	3	10	4	3	4	5
	6	6	2	10	2	6
	29	29	12	12	12	13
	16	16	4	14		
小林新六	33	11	29			
児玉	34	3	16			
胡仲巽	33	12	4			
胡惟仲	34	6	26			
胡惟忠	33	12	4	12	10	
嚴復称	33	12	9			

## こ け



## し

神保濤三郎……	33 ／ 11 ／ 27 ・ 12 ／ 23 ・ 12 ／ 31	城井寿章……	33 ／ 11 ／ 18		5 ／ 4 ・ 5 ／ 31 ・ 6 ／ 28		34 ／ 1 ／ 25 ・ 1 ／ 30 ・ 2 ／ 1 ・ 4 ／ 3 ・	白岩龍平……	33 ／ 11 ／ 29 ・ 12 ／ 1 ・ 12 ／ 2 ・ 12 ／ 7 ・	葉西平……	33 ／ 12 ／ 21 ・ 12 ／ 22	葉瀚……	33 ／ 12 ／ 9 ・	葉……	34 ／ 4 ／ 6 ・ 4 ／ 14 ・ 4 ／ 25 ・ 4 ／ 27	邵章……	34 ／ 3 ／ 22	徐家幹……	34 ／ 1 ／ 5	徐建寅……	33 ／ 12 ／ 27	朱燕生……	34 ／ 6 ／ 26	朱鳳章……	34 ／ 6 ／ 23	柴長五郎……	33 ／ 11 ／ 24 ・ 11 ／ 25		12 ／ 21	四宮憲章……	33 ／ 11 ／ 16 ・ 11 ／ 17 ・ 11 ／ 18 ・ 11 ／ 19 ・	重野安繹……	33 ／ 11 ／ 3 ・	塩谷時敏……	33 ／ 11 ／ 3 ・ 11 ／ 6	塩田……	34 ／ 12 ／ 24	相良……	33 ／ 11 ／ 13	坂常三郎……	33 ／ 11 ／ 13	斎藤孝次郎……	34 ／ 3 ／ 14	斎藤……	34 ／ 7 ／ 4
---------	--	--------	--------------------------	--	---	--	---	--------	--	-------	--	------	------------------------------	-----	---	------	-------------------------	-------	------------------------	-------	--------------------------	-------	-------------------------	-------	-------------------------	--------	--	--	---------------	--------	---	--------	------------------------------	--------	--	------	--------------------------	------	--------------------------	--------	--------------------------	---------	-------------------------	------	------------------------

## た

## そ

## せ

## す

宝辺森太郎……	33 ／ 11 ／ 28	高森強……	34 ／ 1 ／ 8	高間弥之助……	33 ／ 11 ／ 28 ・ 12 ／ 16	高畠庫父司……	34 ／ 7 ／ 4	高塚三郎……	33 ／ 11 ／ 19	田中弘之……	33 ／ 11 ／ 15	田鍋……	34 ／ 4 ／ 20	孫宝瑄……	33 ／ 12 ／ 17	孫士経……	33 ／ 12 ／ 9		34 ／ 2 ／ 4 ・ 2 ／ 5 ・ 4 ／ 2	宋恕平……	33 ／ 12 ／ 4		34 ／ 7 ／ 26	銭君恂……	33 ／ 11 ／ 11 ・ 11 ／ 15	盛荷卿……	34 ／ 6 ／ 23	盛雋卿……	34 ／ 6 ／ 23	瀬川浅之進……	33 ／ 12 ／ 23 ・ 12 ／ 24	瀬川……	34 ／ 1 ／ 19	鈴木左京……	33 ／ 12 ／ 14	鈴木元亮……	34 ／ 3 ／ 12 ・ 3 ／ 13 ・ 4 ／ 7 ・ 5 ／ 3	鈴木元英……	34 ／ 3 ／ 29 ・ 6 ／ 4	鈴木広闡……	34 ／ 3 ／ 12 ・ 3 ／ 15	須藤求馬……	33 ／ 11 ／ 15	酢☐☐☐……	33 ／ 11 ／ 18		34 ／ 1 ／ 1 ・ 1 ／ 16 ・ 1 ／ 19
---------	--------------------------	-------	------------------------	---------	--	---------	------------------------	--------	--------------------------	--------	--------------------------	------	-------------------------	-------	--------------------------	-------	-------------------------	--	--	-------	-------------------------	--	-------------------------	-------	--	-------	-------------------------	-------	-------------------------	---------	--	------	-------------------------	--------	--------------------------	--------	--	--------	---	--------	--	--------	--------------------------	--------	--------------------------	--	--

鄭玉書	手島兵次郎	土谷	辻秀春	津久井茂	陳	張彪	張鄴		谷芳	谷	館森鴻	龍口了信	橘延次郎	橘某介	橘三郎	武山五郎	武下嘉吉	武士波五郎	竹山		竹内銳彦
34 / 6 / 5	33 / 11 / 14	34 / 12 / 24	33 / 11 / 14	33 / 11 / 14	34 / 1 / 13	33 / 12 / 30	33 / 12 / 23	35 / 1 / 2	34 / 7 / 15	34 / 12 / 24	34 / 1 / 26	34 / 12 / 24	34 / 3 / 16	34 / 1 / 23	34 / 1 / 4	33 / 11 / 25	33 / 11 / 15	34 / 4 / 13	34 / 4 / 26	34 / 6 / 24	33 / 12 / 12
	30								• 12 / 22 • 12 / 24		• 1 / 28 • 2 / 14	• 12 / 29							• 6 / 22		

田	...	34	4	29
杜長栄	...	34	1	5
土居純橘	...	34	3	31
僮阿玉	...	34	4	21
遠山景弼	...	33	11	15
遠山景直	...	33	11	29
永井久一郎	...	33	11	23
長岡護美	...	34	5	6
長沼鷺藏	...	34	12	29
中井善吉	...	34	7	8
中桐彦太郎	...	33	12	8
中西	...	34	1	25
中西留応	...	34	1	2
中西正樹	...	33	11	29
中野太郎	...	33	12	26
中橋徳五郎	...	34	7	7
中畑栄	...	33	12	23
中原大作	...	33	11	18
中村	...	34	1	26
中村改二	...	34	1	19
中村兼善	...	33	11	29
中村大作	...	33	11	20
中山孝一	...	33	11	14

ふ		ひ		は		の		ね		に	
藤沢元	34 /5 /27 ・5 /28 ・6 /22	福本誠介	33 /11 /20	福井太一	33 /12 /23	福井兌	33 /12 /23	福井	34 /1 /18	馮耕三	34 /2 /19
										平林	34 /2 /14 ・4 /17
										平尾次郎	34 /1 /18
										日名子政蔵	34 /1 /27
										稗田三平	33 /11 /15
										伴資健	34 /12 /29
											34 /1 /28
										原	33 /11 /17
										橋本実郎	34 /12 /29
										羽黒	35 /1 /10
											34 /1 /4
										野村岩蔵	33 /12 /26
										野川鶴蔵	34 /12 /24
										根津一	34 /5 /6
										新田国先	33 /11 /15
										西村生	34 /6 /22
										西村	34 /4 /4
										西ヶ原	34 /3 /28
										成田安輝	34 /4 /20 ・6 /3 ・6 /26

ま		ほ	
前原	33 /12 /14	方燕石	33 /12 /5 ・12 /7
前田貞次郎	35 /1 /2	方燕廉	34 /2 /4 ・6 /28
前田	34 /4 /8 ・12 /24 ・12 /29	方	33 /12 /13
前田	33 /12 /18	文廷式	34 /6 /26
前島	34 /3 /28	二橋	33 /12 /1 /19
堀内政固	33 /11 /18	藤本	34 /7 /7
堀啓次郎	33 /12 /14	藤波皞	33 /11 /6
堀	33 /12 /9 ・12 /18	藤波元雄	33 /11 /14
細川護美	33 /11 /29	藤田南岳	33 /11 /21
保田	34 /12 /29	藤田	33 /11 /6

[illegible]

## む

山中正雄	山田重光	山田	山崎	柳原又熊	森田	森初太郎	森惟信	村山	村上英省	宗方小太郎	宗方小三郎	美代清秀	宮本正貫	宮本平九郎	宮島順治	宮古啓三郎	峯村善藏		水川復太	三輪高三郎	三宅助三郎	三宅正雄	
34 ／ 12 ／ 29	33 ／ 11 ／ 3	33 ／ 11 ／ 21	34 ／ 1 ／ 12 ・ 6 ／ 28	33 ／ 12 ／ 27	34 ／ 7 ／ 4 ・ 12 ／ 29	34 ／ 1 ／ 1 <brtd><td>33 ／ 12 ／ 6</td><td>34 ／ 3 ／ 15 ・ 3 ／ 26</td><td>34 ／ 12 ／ 29</td><td>34 ／ 1 ／ 19 ・ 4 ／ 10</td><td>33 ／ 12 ／ 24</td><td>33 ／ 12 ／ 25 ・ 12 ／ 26</td><td>34 ／ 12 ／ 24 ・ 12 ／ 29</td><td>33 ／ 11 ／ 14</td><td>33 ／ 11 ／ 20</td><td>33 ／ 11 ／ 14</td><td>33 ／ 12 ／ 26</td><td>6 ／ 28</td><td>34 ／ 2 ／ 2 ・ 4 ／ 17 ・ 6 ／ 1 ・ 6 ／ 24 ・</td><td>33 ／ 11 ／ 30</td><td>33 ／ 12 ／ 23</td><td>33 ／ 12 ／ 8</td><td>33 ／ 11 ／ 15</td></brtd>	33 ／ 12 ／ 6	34 ／ 3 ／ 15 ・ 3 ／ 26	34 ／ 12 ／ 29	34 ／ 1 ／ 19 ・ 4 ／ 10	33 ／ 12 ／ 24	33 ／ 12 ／ 25 ・ 12 ／ 26	34 ／ 12 ／ 24 ・ 12 ／ 29	33 ／ 11 ／ 14	33 ／ 11 ／ 20	33 ／ 11 ／ 14	33 ／ 12 ／ 26	6 ／ 28	34 ／ 2 ／ 2 ・ 4 ／ 17 ・ 6 ／ 1 ・ 6 ／ 24 ・	33 ／ 11 ／ 30	33 ／ 12 ／ 23	33 ／ 12 ／ 8	33 ／ 11 ／ 15

## り ら

梁鼎葵	34	1	7	1	8	1	17	4	27
梁元卿	34	1	13						
劉慶汾	33	12	20	12	22	12	25		
劉觀文	33	12	9						
劉溫玉	34	1	5						
龍積芝	34	4	14	4	15	4	16		
李昂星	34	4	18						
羅	34	1	17						
	34	2	14	4	22				
米庸義	33	12	25						
芳川贅夫	34	7	7						
吉田永二郎	33	12	25	12	26				
吉田順藏	33	11	30						
吉田	34	6	28						
楊自超	34	1	28						
陽鼎民	34	6	6						
陽昂民	34	4	17						
陽	34	2	19						
俞曲園	34	4	2						

## よ

## ゆ

結城琢	34	2	18	5	3	11	17	11	22
山本悌三郎	33	11	16	3	12	17	18		
山本憲介	33	11	21	3	23	11	18		
山根	34	2	13	6	22	5	27		

## 他 わ ろ れ

□煜	33	11	11						
渡辺正雄	33	11	29						
盧壽齡	34	1	2						
連	34	4	29	5	1	3	24	3	27
黎元洪	34	1	7	2	13	3	27	6	28
林孝恂	34	3	19	3	24	3	27	3	29
林琴南	34	3	24						
林朝圻	34	4	18						
林少雄	34	3	16						
林	34	7	2						
呂烈輝	34	1	6						
呂長康	34	1	6						
呂	34	1	6						
凌雲卿	34	1	5						